578-71
1200501520557
578
71

8.6.13

愛山山路彌吉著

乃木大將

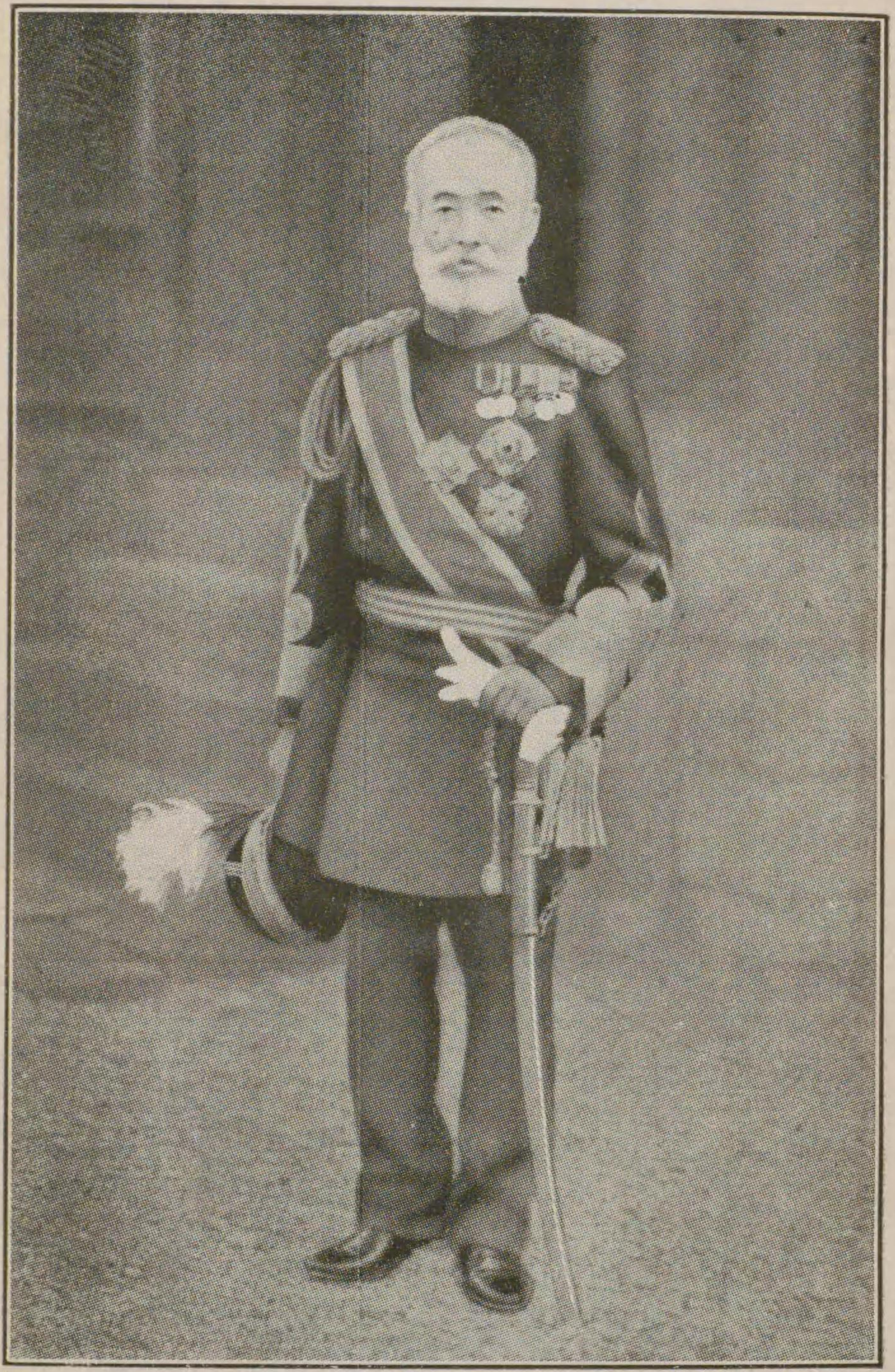
東京民友社發行

乃木大將

帝國圖書館藏

殉死當日記念撮影の乃木大將と夫人靜子

大正元年九月十三日午前九時五十分赤坂新坂町なる大將自邸の居室に於ける撮影



殉死當日記念撮影の乃木大將

是れ亦た殉死當日大將自邸に於て撮影せられたるものにして今回英皇よりを贈與あらせられたる大勳章バツスを胸間中央（右邊二個上は旭日桐花章、下は金鵄勳章功一級）に挂けられたるは其接伴員として英國御名代に對する記念の意を知る可し

殉死當日記念撮影の乃木大將夫人靜子

是も亦前掲寫眞の外別に撮影せられたるものなり夫人の服裝は殯宮拜禮の喪服其の儘のものにして夫人最終の記念たるなり

臣希典上

うつし世を
神さりましし
大君の
みあとしたひて
我はゆくなり

乃木大將辭世の和歌

出てまして
かへります日の
なしときく
けふの御幸に
逢ふそかなしき

希典妻
静子上

乃木大将夫人辭世の和歌

遺言條々

第一 自分此度御跡ヲ追ヒ奉リ自殺候段恐入候儀其罪ハ不軽存候然ル処明治十年之役ニ於テ軍旗ヲ失ヒ其後死処得度心掛候モ其機ヲ得ス皇恩ノ厚ニ浴シ今日迄過分ノ優遇ヲ蒙リ追々老衰最早御役ニ立候時モ無余日候折柄此度ノ御大変何共恐入候次第茲ニ覚悟相定候事ニ候

第二 両典戦死ノ後ハ先輩諸氏親友諸彦ヨリモ毎々懇諭有之候得共養子弊害ハ古来ノ議論有之

特ニ華族ノ優遇ヲ蒙リ居実子ナラハ致方ナキモ却テ汚名ヲ残ス様ノ事ハ……ノ天理ニ背キ……

第六 書籍類ハ学習院ヘ採用相成度分ハ寄附其餘ハ長府図書館ニ寄附可致候ノ分ハ兎モ角モ

第七 父君祖父曾祖父君ノ遺書類ハ乃木家ノ歴史トモ云フヘキモノナレハ厳ニ取纏メ眞ニ不用ノ分ヲ除キ佐々木侯爵家又ハ佐々木神社ヘ永年限ニ保存ヲ頼ミ可申候

第八 遊就館ヘ出品ノ分ハ其儘寄附可致中乃木ノ家ノ紀念ニハ保存方同館ヘ依頼

第九 静子儀追々老境ニ入リ石林ハ不便ノ地ニ付渋谷ハ心細クトノ事モ尤モナレハ集作ニ譲リ中野ノ家ニ住居可然同所ハ中野ノ地所家屋ハ静子其時ノ考ニ任セ候

第十 此方屍骸ノ儀ハ石黒男爵ヘ相願置候……

……

ナシ

特ニ華族ノ御優遇
相蒙リ居実子ナキハ
御方ニ差シ支ナキ 却テ
汚名ヲ残スノ奚ヘ
其天理ニ背キ
タル事ハ断シテ不可有之
祖先ノ墳墓ノ守護
ハ血縁ノ有之限リハ
其者共ノ気ヲ付ケ可申
事ニ候

第三 資財分与ノ儀ハ別紙
ノ通リ相認メ置候
其他ハ静子ヨリ相当
処分可致候

第四 遺物分配ノ儀ハ自分
軍職上ノ副官タリシ
諸氏ヘハ時計メートル
眼鏡馬具刀剣等
軍人用品ノ内ニテ見
計ヒノ儀ハ塚田大佐ニ
御依頼申置候 大佐ハ
余等両人ノ意志ヲ最モ
能ク承知ノ人ニ付 静子承知
ノ儀モ同大佐ニ御相談
其他ハ当方ニテ任セ
可申

第五 御下賜品(各殿下ヨリノ)
御紋付ノ諸品ハ悉皆
学習院ヘ寄附ス
寄附ノ儀ハ松井
猪谷両氏ニ於テ取計
可申候

……

中野ノ家ハ住居ヲ仕
用モ可 其中野ノ地所
家屋ハ静子其時ノ
考ニ任セ候

第十 此方屍骸ノ儀ハ
石黒男爵ヘ相願置
キタル故 医学校ヘ
寄附可致 墓下ニハ
毛髪爪歯(静子モ同様)ヲ
入レテ充分ニ候(静子承知)

○旧藩ノ……
……
……
……

右ノ外ハ静子ヘ申付
置候ニ付 御相談
被下度候 伯爵乃木家
静子生存中ハ名義
可有之候得共 呉々モ
断絶ノ目的ヲ遂ケ
候儀大切ナリ 右遺言
如此候也

大正元年九月十二日夜

希典 (花押)

湯地定基殿
大舘集作殿
玉木正之殿
静子どの

578-71

乃木伯夫妻自殺の事は著者の心に甚大の刺擊を與へたれば、豚兒等に大將の事迹を語り聞かさんと思ひ、彼等の記憶し易き樣に韻文につゞり、題して乃木大將と云ふ。昔し琵琶法師の平家を語りしやうに、彼等に口ずさみ易からしめ、自然に其高風清節を銘記せしめん爲なり。民友社の友人予に勸めて其注釋を造り、其歌と併せて之を世に公にせしむ。讀む人若し是を以て大將の爲には未見の友人にして、しかも學問の流儀の全く異なりたる一書生の、飾らざる、僞らざる心を以て作りたる一篇の哀歌なりと見ば可なり。

大正元年九月

愛山生

乃木大將目次

（一）我等をして乃木大將を歌はしめよ……一
（二）乃木氏の祖先の事……二
（三）長州男兒……四
（四）乃木十郎希次の事……七
（五）馬關の攘夷、乃木十郎盡力の事……一一
（六）乃木希典、庭訓に依りて勇士となる事……一五
（七）乃木希典、玉木文之進に學ぶ事……一七
（八）乃木希典、明倫館に入塾す……二四
（九）長州四境戰爭、希典小倉表出陣の事……二九
（一〇）希典、伏見の兵營に入りて佛式の操練を學ぶ事……三四
（一一）乃木希典、大義親を滅す事……四三

（一二）西南戰爭、希典武功の事……五三
一、希典、植木の戰に聯隊旗を失ひし事……五五
二、希典、聯隊旗を失ひしを以て一生の恥辱と感じ居たる事……六九
三、希典、木の葉に激戰の事……七四
四、植木、木葉の戰爭は乃木一代中の大功名と云ふべきものなること……七八
五、希典、銃創を負ひ久留米病院に入院の事……八一
六、希典、久留米病院脫走の事……八四
七、希典、熊本城入城の事、熊本鎭臺參謀となる事……八九
（一三）希典、湯地氏を娶る事、獨逸に遊學する事、豐橋旅團長を辭したる事……九五
▲青年士官たりし時代の希典の行儀の事……九七
▲希典、湯地氏を娶る事……九七
▲希典、獨逸に遊學の事……一〇〇
▲希典、豐橋旅團長たりしとき辭職の事……一〇二
（一四）日清戰役、希典滿洲に出征の事……一〇五
一、希典、滿洲に出陣の事……一〇六
二、希典、强敵に逢はざりし事、幷に大連灣容易に日軍の手に歸したる事……一〇九
三、旅順陷落の事……一一三
四、希典、蓋平城に武名を揚ぐる事……一一八
（一五）遼東還附、希典臺灣出陣の事……一二〇
五、希典、太平山に戰ひしより、金州方面守備隊司令官たりし事……一二四
六、希典、臺灣出陣の事……一二九
（一六）希典、臺灣總督となる事……一三二
（一七）希典、丸龜の師團長となりたる事、及び石林村閑居の事……一三九
▲希典、第十一師團長となる事……一四一
▲希典、休職となる事……一四三
（一八）希典、旅順出征の事……一四四
▲石林村に希典閑居の事……一四六
▲日露戰役、希典出陣の事情……一四九

▲勝典、保典兄弟出陣の事……一五八

(一九) 旅順陷落の事……一六〇

▲旅順の戰、勝典保典戰死の事……一七二
▲希典の詩にて二百三高地を爾靈山と名づくる事……一八一
▲希典陣中の振舞の事……一八三
▲旅順陷落、希典ステッセル會見の事……一八五
▲旅順戰爭の希典に與へし感懷如何……一八七
▲旅順の戰爭中希典の妻の振舞の事……一八九

(二〇) 希典凱旋、學習院長となる事……一九〇

▲希典、奉天の戰に加はる事……二〇三
▲希典、陣中振舞の事……二〇四
▲希典凱陣の事、鄕里に立寄る事、希典の妻の健氣なりし事……二〇七
▲希典、乃木家絕家の覺悟の事……二〇九
▲希典、戰死者の父老を慰む事……二一二
▲希典、數ば廢兵院を見舞ひたる事……二一五

▲希典が學風の事、素行會の會員となる事、並に吉田松陰、山鹿素行崇敬の事……二一六
▲希典、學習院院長となる事……二二九
▲學習院長としての乃木希典(一)……二三一
▲學習院長としての乃木希典(二)……二三三
▲學習院長としての乃木希典(三)……二三五
▲希典、伯爵となる事……二三七

(二一) 希典自殺の事……二三八

▲希典夫妻滿洲に赴く事……二四四
▲希典、東鄕と共に東伏見宮殿下に隨行して英國に赴きし事……二四五
▲明治天皇崩御希典殉死の事……二四八

補遺

▲乃木家の氏神の事……二五二
▲祖先の墓の事……二五三
▲又一說……二五五

▲乃木十郎の事……二五六
▲義士の墓に參詣の事……二五六
▲長府に於ける乃木家の生活の事……二五七
▲集童館の事……二六一
▲玉木の塾にて學問する事……二六三
▲希典、一旦歸藩の事……二六四
▲前原騷動の前、玉木正誼、希典を誘ふ事……二六七
▲又一説……二六八
▲日本刀と洋刀とにつき希典父子異見の事……二六九
▲希典、久留米病院脱走の事……二七〇
▲希典、大佐昇進祝の事……二七一
▲日清戰役の時、希典淸人の捕虜を優遇したる事……二七一
▲蓋平の戰……二七二
▲模範師團長の時代……二七三
▲希典滿洲陣の事……二七五

▲日露戰役凱旋後長府に歸りし事……二七八
▲凱旋の時、決死の趣奏上したりとの一説……二七九
▲恩賜の金を散じ盡くす事……二八〇
▲學習院院長時代の事……二八〇
▲大館集作の事……二八六
▲希典の名の事……二八七
▲渡邊重石丸の事……二八八
▲希典前に死に、內室之に殉したりとの説……二八九
▲希典の遺書の事……二九一
▲祭粢料を賜はりし事……二九八
▲希典夫婦葬儀の事……二九九
▲碑銘の事……三〇四
▲希典、僕婢にやさしかりし事……三〇六
▲希典の生活の質素なりし事……三〇六
▲希典、年金廢止論を唱へし事……三〇七

▲希典、商人を嫌ひし事……………………三〇七

乃木大將目次終

乃木大將

山路愛山著

（一）我等をして乃木大將を歌はしめよ

うつし世を
みあと慕ひて
英雄の
歌ひけらくは
敷島の
うとしといへど
迫り來て

神さりましし
我と我が
徳をたゝふる
我はしも
大和の歌の
あはれ今
いはねば苦し

すめらぎの
生命を棄てし
人ありて
詩人に非ず
道にこそ
百感胸に
自ら

掩ひ兼ねたる　眞情を　歌ふも罪と
ならなくと　思ふ心の　わりなきを
許す人もぞ　ありぬべき。　此につらぬる
思ひ草　しける言の葉　茂くとも
いざや聞けかし　同胞よ。

（二）乃木氏の祖先の事

出雲の國の　片ほとり　八束郡に
乃木と云ふ　里のありけり。　其里に
古き塚あり、　其塚は　國の守護なる
佐々木氏、　名は高綱と　云ふ人の
なき跡なりと　昔より　里の老翁の
傳へ來し　口の碑　古りしかど。
夏は茂れる　蓬生や　冬は落葉に
埋もれて　世に知る人も　なかりしに
此所を苗字の　地となせし　佐々木の黨の
其中に　名を揚げ家を　起したる
豪傑ありて　此頃は　詩人も歌ふ
乃木の村。

乃木希典は宇多天皇の皇子敦實親王より出づ。親王の子雅信、源姓を賜ひ始めて人臣に列す。其孫兵庫助成頼近江國佐々木の莊に居る。是れ近江源氏佐々木氏の祖なり。乃木氏は則ち佐々木の黨にして始め下野國都賀郡野木郷に居り、それより出雲國乃木に徙り住みたるものなりと云ふ。

乃木村は出雲國八束郡に在り。昔は意宇郡に屬せしが、明治以後郡併合の時意宇郡は他の二郡に合して八束郡となれり。此村に古き塚あり。土人は當國の守護佐々木高綱の墓なりと云ひ傳ふ。高綱の墓と云ふは受けられぬ說なれども、佐々木

黨乃木氏の此に住みしことは明かなり。佐々木黨の山陰道に雄視したること由來甚だ舊し。戰國時代には尼子氏ありて周防の大内氏と中國の覇を爭ひ、大内氏亡びて後も數ば毛利氏を惱まし、永祿七年富田落城に至りて始めて其根據を覆へされたり。乃木氏の祖先も恐らくは其世には毛利氏の爲に被征服者の悲しき位置に落されたるものなるべし。

乃木希典二十六歲、陸軍少佐たりし昔、下野國都賀郡野木神社に參詣し、家記に依れば自分先祖は此村より出でたるやうに思はるゝ故、取調べありたしと同社神職に依賴したりと云へり。希典は又出雲國の乃木村を夫妻にて訪ひ祖先の跡を弔ひしことあり。

(三) 長州男兒

美しき哉　仁の里、　里の風儀は
自ら　人を化すると　古の
聖者の　言ひし　言こそ
眞なりけり。　天下る　鄙にはあれど
山陽の　西のはてなる　長門には
丈夫兒多し　近き世に　尊攘の義を
唱へつゝ　其赤き血を　國の爲め
そゝぎ盡して　悔いざりし　壯士烈士の
數多き　中に育ちし　みどり兒は
麻の中なる　蓬とも　言ふべかりけり。
白絲を　染むる色香は　里の風
長門男兒の　自ら　世に殊なれる
人と爲り。

乃木希典は毛利家支藩長府毛利氏の士乃木十郎希次の第三子なり。嘉永二年十一月を以て江戸麻布日ヶ窪の藩邸に生る。安政元年希典七歲の時、吉田松陰海外

に脱出せんことを計りて遂げず、安政六年希典十一歳の時松陰、井伊大老の爲に斬らる。萬延元年希典十二歳にして櫻田の變あり、翌年頃より本家萩の毛利氏始めて官武周旋に從事し、永井雅樂開國進取の説を持し專ら公武一致に奔走す、松陰門下の有志輩を始として防長二州の壯士永井の微溫なる調和策を喜ばず、朝議も亦攘夷に傾きしかば雅樂遂に士道に依りて自殺を命ぜられ、長州藩論一變して攘夷の先鋒となり文久三年馬關に於て外舶を砲擊す。是れ實に希典十五歳の時なり。此時代に於る防長二州の士氣は誠に盛なるものにて英雄豪傑雲の如くなりしと云ふも可なり。防長二州が斯く人才の淵藪たるには仔細あるとなれども此には述べず。但し斯樣なる士風の間に育ちたる少年が自ら周圍の感化を蒙りて異彩を放つ人とならざるを得ざるは勿論の事なり。希典の父は長府藩の江戸詰の士にて希典も江戸に生れ十歳頃迄は江戸に在りたる樣子なれども其後に長府に移住したり。其臘の如き柔らかき少年の腦髓に長門男兒の颯爽たる英姿が深き印象を與へしは疑ふべからず。孔子が里は仁を美となすと云しは郷里の美風仁義の人を造るを言ふ也。希典の後に至りて日本の名將たりしもの故ありと謂つべし。

（四）乃木十郎希次の事

雄劍鈍り　壯士老い　泰平無事の
夢さめず　虎に均しき　武士の
鼠になりし　世の末や　嘉永六年
水無月の　三日と云ふにぞ　亞米利加の
軍の船が　浦安の　此の日の本に
寄來つゝ　天地轟く　一道の
石火矢の音　すさましく　人の眠を覺しける
恐ろしかりし　有樣を　敢て騷かず
驚かず　豫てより世は　かくこそと

覺悟したりし　英雄の　一人は誰ぞ
是は是れ　長門の國の　長府なる
毛利氏にぞ　仕へける　乃木の十郎
希次と　云ふものなりき　希次は
其頃の世に　腰抜と　あざけられける
儒醫なりし。　されど武門の　末なれば
身は長袖に　似たれども　烈しかりける
こゝろざし　皇國の爲に　死なんとは
思ひまうけし　ことなりき。

乃木氏は醫と儒を以て長府侯毛利氏に仕へ百石を食みたる江戸定府の士なりき。されば希典も江戸の藩邸に生れたり。希典の父を十郎希次と云ふ。希典の母は常陸土浦土屋侯の藩士長谷川某の女なり。十郎希次は儒醫の家に生れたれば文學は家業にしてその造詣固より深かりしかども、かゝる業家に似合はず、好んで兵家の書を讀み、自身も武藝に勝れ、弓術も上手にて京都の三十三間堂に通し矢を試みたる程なり。されば元龜天正の戰史、甲越二氏の軍略などにも深く心を用ゐたりと云ふ。是は花見る人の長刀とやらん云ふやうなることにて家業に似合はざる醉興とも云ふべけれども、其時代の武士社會は專門家に智識なく門外漢に學問あり、上に人才なく、下に豪傑の潛みし末世なりしかば高貴の武職を襲ぎし門閥には懦弱無智の貴人多く下士若くは儒者、醫者などに却て武道を硏くものありしなり。乃木十郎も其一人にて外交の事次第に切迫し來りし世には武技、兵學こそ大切なりと心得しかば、さる筋に專ら心掛けたるものと思はる。されば嘉永六年六月米國水師提督ペルリの渡來したりし時も十郎は江戸に在りて世人の遽に騷ぎ立つを見、竊に我は始よりかゝることもありぬべしと覺悟したれば兵書も讀み、武技も講じたるなり、今さら驚くとかはとて心中多少の滿足を感じたることならん。かゝる人なりしかば武邊の吟味嚴重にしてすこしなりとも刀を錆びさする人などあれば其不心得を責めて絕交したることもあり、長府に移住の後も或時

は麥畑の中に身を蔽ふものもなくて一夜を明かし、我身體の果して之に堪へ得るや否やを試みたることもあり。或は屋敷の周圍を歩きまはり五晝夜にして始めて疲勞を感じ打倒れければ、さらば君命ならんにはそれ程は休まず憩はずして働き得べしと覺りたりなどゝも云ふなり。天下の勢將に變ぜんとする時は英雄兒先づ之を知る。乃木十郎は時勢の赴く所を知り時勢に率先したるものなり。希典はかゝる人の子なり。誠に此父にして此子ありと謂ふべし。

希典十一歳の時、父の十郎藩侯に諫言し、譴を蒙りて藩地に追下され減祿閉門を命ぜらる。十郎則ち妻子を伴ひて長府に著し町の片ほとりに三百坪ばかりの地を購ひ、其一隅に在りし古き足輕長屋を其儘住宅としたり。此家は六疊、三疊、二疊、各一間總計三間十餘疊に過ぎざる陋屋なりしかども十郎は一向頓著せずして住み居たり。其頃の乃木家の生計は至て窮し疊は破れ、屋根は漏り、常人の住むに堪へざりし程なれども武具のみは立派に飾り、弓、矢、刀、槍等の武器を所せまきまで並べありき。かくて藩譴の解くるまでは乃木家は往々衣食の資にさへ乏しきことありしかば、希典は幼年ながら色々苦勞したることもありけるとぞ。

（五）馬關の攘夷、乃木十郎盡力の事

現人神の　しろしめす　瑞穗の國は
昔より　國の礎　かたくして
搖がざりけり。　夷等は　皇の御威稜を
かしこみて　まつろひにけり。　されぱこそ
昔し蒙古の　荒れ出でゝ　東に西に
かけ廻り　馬蹄の下に　青草の
なしと言ひける　其世にも　弘安四年の
秋かとよ　筑紫の海の　浪あれし
はやちの中に　武士の　劒の光
すさまじく　風雨と共に　戰ひて、

世界のはても　靡かぬは　無しと誇りし
強國の　十萬の兵　悉く
海のもくずと　なり果てゝ　生きて還るは
三人と　青史に記せし　勳業も
ありけるならし。　此國は　國は小さく
人强し。　獨立自尊、　二千年、
侮るものゝ　無かりしを　文恬武凞の
世の末や　幕府の有司　膽なくて
國の威嚴を　守り得ず　人を恐るゝ
つたなさを　憤りける　武士の
矢竹心の　現はれて　文久三年
夏五月　赤間關の　夜の波
より來し船を　目掛けつゝ　打かけたりし
砲聲は　是ぞ攘夷の　魁と
勅を奉じて　たじろがぬ　長門男兒の
功勳とて　六十餘州　どよめきて
ほめたゝへけり。　さる程に　乃木の十郎
希次は、　時來れりと　喜びて
國に死なんの　志、　たのもしくこそ
見えにける。

乃木十郎は一旦譴責を蒙りて日蔭の身となりしかど攘夷論の盛んなりし文久二三年頃は藩譴も解けたれば再び世に出でたり。此頃防長二州は尊王攘夷の中心と言はれし程にて毛利の本家は天朝の御覺もめでたく文久三年京都より攘夷の期限を其年五月十日と仰出されしも專ら長州藩の周旋に依れりとぞ。されば本家と同功一體なるべき長府藩に於ても固より異義あるべきに非ず。其期日の夜に當り馬關に於て本家の軍艦二雙に陸兵を以て助力し、折しも東方より來りて府中

港に碇泊したる外船に向て發砲したりしを以て外船も應戰したれども竟に撃退したり。是れぞ日本國に於て勅命を奉じて攘夷の魁をなしたるものなりしかば、兼て徳川幕府の外國に對する政策の卑屈柔弱なるを憤りたる諸藩の志士は長州を以て神州正氣の集る所とし之を喝采したり。乃木希次は武道の心掛深き人にて固より赤熱なる攘夷論者の一人なりしかば是れ正に志士身を國に獻ぐるの秋なりとて奔走盡力到らざる所なかりき。五月十日の夜撃たるは米國商船ペンブローク號なり。それより五月二十三日佛國汽船キャンシャン號を撃ち、同二十六日和蘭軍艦メジッザ號を撃ち、六月一日米國軍艦ヴイミング號を撃つ。此米艦は戰鬪準備ありしかば毛利本家の軍艦壬申丸、庚申丸撃破せられて沈沒す。同六月五日佛國軍艦セミラス、タンクレード二艦を撃つ、二艦は固より戰を期して來りしことなれば彼より逆まに陸上に砲撃し、長州方頗る苦戰に陷り、敗北したりしかば二艦より兵士を上陸せしめ追撃せしがやがて引取りたり。是にて戰爭は前後五回ありしなり。此頃の事なりしか、若くは明年八月四國軍艦來襲の時なりしか時日は定かならねども乃木十郎は味方の敗軍を聞き大に憤り、手槍を提げて長府の町はづれに出で武士既に戰場に臨む上は固より命を棄つる覺悟あるべきなり。されば敗軍の上は死にて君國に報ゆべき筈なるに萬一見苦しくも敗走して此處まで逃れ來るほどの臆病者あらんには希次立どころに突き殺すべしとて四方を睨んで立たるさまのすざましかりしとは其世を忘れぬ父老の物語なり。

（六）乃木希典庭訓に依りて勇士となること

此父にして　此子あり　庭の訓の
きびしくて　武道の吟味　強ければ
心やさしき　若者も　たけき猛者とは
なりにけり。

乃木十郎はかくの如き人なりしかば希典の幼年も頗る嚴格なる庭訓を受けたりと

見ゆ。たとへば或年の冬の事なりき。希典、今日は寒しと云ひしを、十郎聞きて汝寒くば着物を着せ取らせんとて其儘希典を裸體にし氷ばかりの冷水をその頭上に打かけしとぞ。其秋霜烈日にも比すべきスパルタ風の訓練もて子弟を御せしこと思ふに堪へたり。此人、藩の世子（毛利元敏）の傅役となり世子が明倫館に學ぶ爲に萩に行きし時、隨行し、世子、毛利本家の主、敬親に謁し食事したりし折、飯粒の落ち散りしを、若殿御聞き候へ、米穀は農民の終日炎天に立ち夏畦につかれ耕作して造り出したるものにて誠に粒々辛苦とや申すべき、されば落ち散りし飯粒を拾ひ食はんは大名に似合はぬことなりなど云ふ流俗の説に從ひて疎末にいたさるべきものには候はず、若殿の膳部の上より落ちたるものに候へば自身拾ひて召上るべきなりと人々列坐の前にて憚らず直言したる程なればまして其子息に對して姑息の愛に溺るゝことのなかりしは言ふまでもなし。希典其頃は心やさしき少年にて藩の學校敬業館に學びし時は文學の才自ら現はれ、自らも讀書生とならんとする志もありけるにや父に請ひて萩の明倫館に遊學せんとしたる

を今の世に儒生、文人となりて何をかなさんとする、讀書は勿論怠るべきに非れども武士たるものは先づ武藝を勵むべきなり、汝若し武藝を好まずば農夫となるべきのみ、ゆめ懦弱なる文人となる勿れとてその遊學を許さゞりき。累代儒醫の家に生れたる希典が自然に儒雅の趣味ありしは父祖の遺傳とも云ふべし。されど希次は文ありて武なきは士に非ずとて子息を敎ふるにも武道の吟味强かりしかば其子の希典は世界に雷名を轟かしたる名將となり、希典の弟玉木正誼は其先輩前原一誠の爲めに勇戰して死にたり。一家兄弟二人の烈士を養成し得たる希次の風采、益す以て思ふべきに非ずや。

（七）乃木希典、玉木文之進に學ぶこと

其頃萩に　玉木氏　文之進とて
聞へたる　老士ありけり。　關西の
志士の巨魁と　かんばしき　名を遺したる

松陰の　叔父なりければ　自ら
氣象も　それに似たりけり。　玉木と乃木は
父祖の世に　血緣あれば　一類の
うとからざりし　仲なりし。　それさへあるに
學問の　筋も同じき　人なれば
國を憂ふる　志、　人に接する
忠信の　誠も似たる　文之進
十郎ともに　友垣の　堅き契を
結びけり。　されば十郎　其子をば
玉木の老叟に　從ひて　眞の道を
學べとて　許してければ　春淺き
谷の門出る　鶯の　古巣を立ちて
高き枝に　飛び移りたる　心地して

おとなしかりし　若人は　父の庭訓
かしこみて　學の窓に　いそしみぬ。
人の心は　佛説の　薪につける
火に似たり。　一たび焚へし　赤き火の
いや廣がりに　廣がりて　燒かざる草も
なきがごと　志士仁人に　宿りける
忠魂義魄　死なずして　傳へ傳へて
若人も　國を愛する　丈夫兒と
なりにけるこそ　めでたけれ。

希典の明倫館に學ばんとする志は父十郎の意見に依りて一旦は止められぬ。されど斯くてあるべきに非れば希典は窃に家を脱し萩に至り玉木文之進を尋ねて學問の志ある由を語り、其援助を請ひたり。玉木と乃木はその昔乃木善菴と云ふもの乃木の家より出でゝ本藩に仕へ玉木の家を起しければ濃き一類なり。されば

乃木十郎と文之進とは親戚の交厚かりしと見え十郎の子息等は文之進を玉木の叔父など云ひ居りしものゝ如し。然るに此玉木の叔父も父の十郎と同じく當世に生れて儒生文人たらんとするは心得違なりとて大に希典の不心得を叱りければ希典は頼む木蔭の雨の漏る心地して玉木の門外にすゝり泣きして立ちしを、玉木の妻室餘りに氣の毒に思ひしかば段々夫に懇願し、さらば我家に居て書を讀みながら暇あれば農業などして筋骨を養へよ、必ず文儒の柔弱に陷ること勿れとて始て其門人たることを許ししかば希典はそれより玉木の家の塾生のやうにして學問に餘念なかりしとぞ。

此玉木文之進は名を正韞と云ひ吉田松陰の叔父なり。希典は江戸の藩邸に生れ松陰の刑死したる頃までは猶ほ江戸に在りしかば其面だにも見しことはあるまじと思はる。或は一見の機會ありしにもせよ、松陰が投海の計成らず、幽囚の身となりしは希典が六七歳の頃の事なれば後日の記憶に殘るべきに非ず。されば希典と松陰は未見の人なりしと定むべきなり。さりながら松陰の叔父玉木氏の門生となり、日々其敎を受けしかば松陰の人となりに就きては聞くこと多かりしなるべし。寅次郎（松陰の名）は身幹小さく、色黒く、白痘顔に満ち、額廣く、頤尖り、肩上がり、頰こけ、鼻高く眼するどく、恐ろし氣なる男なりしかど、言語は爽にして人の挨拶などは柔和の方なり、酒飮まず、煙草を吹かず、諸事無頓着にて袖にて鼻汁をふきたる程の男なれども至誠、物に接し、片言自ら欺かず、人の爲す能はざる所をなし、人の言ふ能はざる所を言ふ異物にて十四五歳の時より豪傑を以て人も許し、自らも任じたりなど玉木翁の話すを聞きては少年希典は面のあたり松陰に接したる心地して其偉大なる人物の威に撃たれたる感ありしなるべし。まして玉木翁は尋常の人ならず、松陰とは叔姪志を同うすると云ふべき程の事にて水戸學派の書を愛讀し尊皇攘夷の志厚く、和流の砲術に熱心にして讀書人ながら武道に志厚かりし人なり。家を修むるに儉約一味の人にて郡奉行となりしときは清廉潔白を以て一藩に稱讃せられたり。此人常に淺見安正の靖献遺言を愛讀し、身を愛まずして義の爲に捨つべきことを說き

たり。希次の人と爲りと此人の趣向とを併せ考ふるときは二人の間には獨り親族の交ありしのみならず、同志同好の友たりしこと察すべし。かゝる父兄の薫陶を蒙りたる少年が後日に至りて君國の爲に不惜身命の節操を現はしたること敢て怪むべきに非ず。

或老人の話に文久元治の世に長州の英雄豪傑は好んで死を急ぎ外目よりは命を粗末にするやうに見へしもの多し。久坂義助なども死なで濟む所にて死にたりと云へり。思ふに其世には國家の獨立を全うするは人間焦眉の問題となりたれば志士仁人自ら身を殺して仁を爲すに急ぎたる傾なきに非ず。吉田松陰なども幕吏の訊問に逢ひしとき其問を受けざるに間部閣老要撃の計ありしことを自白し、好んで死地に陷りたり。是れ其故何ぞや、松陰の説に君子の心は理なり、體滅し氣竭ても理は古今に亘り天地を窮めて未だ嘗て歇まざるものなりと云へり、是れ其著述留魂錄の大意なり。死すべき時に死するは正氣を天地の間に留むる所以にして死すべき時に活くるは天地の正氣を一掃する所以なり。其死を急ぎて後人

を激勵せんとしたること亦宜ならずや。志士仁人の雄魂毅魄は火の如し、一點の星火も、焚へ廣がれば以て千里の野を焚くべし。松陰、希次、正韞等防長二州の英雄の心に焚へたる靈火は此理に依りて乃木希典等に移りたり。生命は生命を生み、英雄は英雄を起すとはかゝることをば言ふなるべき。

希典の玉木家に在りし時なるべし、一日松陰自筆の士規七則を讀みて感奮し、師に請ひて其書を貰ひ受け、常に肌身に付け置しと世の人のする護身符など云ふものゝ如くなりしが、明治十年田原坂激戰の折に失ひたりと云ふ。按ずるに希典が玉木家に於て塾生同様の身となりしは十五六歲の時なりしと思はるれば、文久元治の交に當れり。されば防長二州に於ては內外の交渉多事を極め士氣最も旺盛なりし時なり。則ち文久三年五月には天下を驚かしたる馬關に於ける攘夷の手初あり。尋で其年の八月には親征延引の詔出で、長州藩人は本支藩共に入京を禁せられ、名高き七卿落の事ありて長州周防は志を京都に得ざりし志士の淵藪となれり。明くれば則ち元治元年にして其七月には京都蛤門合戰

あり。八月の初には四國軍艦の長州入寇及び和議あり。十一月には三大夫自殺、藩主幕府に對して謝罪の事あり。希典少年と雖も此等の事變に遭遇して心緒の亂るゝと恰も狂瀾怒濤の中に立ちしが如くなりしなるべき歟。時世は英雄を作ると云へり。かゝる時世に育ちしものは自ら英雄兒たらざるを得ざるべし。

(八) 乃木希典明倫館に入塾す

『赫々として　威名ある　東藩の兵
八萬騎　我長州を　襲はんと
屯ろしてあり　浪華城。　我曹の
死ぬべきは　問はん果して　何の日ぞ。
壯士劍を　杖にして　笑みながら待つ
砲聲の　國の四境に　聞ゆるを』
是はこれ　防長二州に　さるもの、
ありと聞えし　高杉氏、　名は晋作の
歌ひける　漢歌をしも　和らげて
此に移せし　大和歌。　猛くはげしき
奇兵隊。　期する所は　何ものぞ
死にて報いん　國の恩。　幕府の兵を
引受くる　長門男兒は　膽太し。
紅もゆる　若き血を　正義の爲に
必ずよ　流さんものと　誓ひてし
慶應の世の　頃とかや　乃木希典は
兼てより　願ひしことの　許されて
明倫館に　入塾す。　坐しては學ぶ
文の道。　起ては習ふ　武の敎。
敵を恐れず　あなどらす　軍の用意

學びの窓に　書を讀む
すぐれ人　後の鑑と
しながらも
師弟は共に
なりにけり。

長州は元治元年十月藩主父子俗論黨に擁せられし爲め一旦幕府に對し謝罪降服の態度を取りたれども、元來藩士一同の志に非れば奇兵隊を始め所謂諸隊は幕府の命に從はず國論の振興を計りたり。されば其頃高杉東行が『身に漆し、炭を呑むは吾曹の事なり。防長の坏士を護し來らんを要す』と吟じ出でたるは誠に二州の輿論を道破したるものなりける。かゝりしかば慶應元年正月東行等一呼して諸隊響應し、兵を擧げて萩に向ひしより日を數ふれば僅に十六日、凡そ十一戰して俗論黨悉く破れ、藩論主戰に一定し、二月九日萩に於て毛利本家の君侯父子、長府侯、清末侯、毛利本家の家老以下會議してたとへば天下を敵とするも闔境志を一にして尊皇の大義を伸ぶべしと盟ひしより防長二州は再び義氣の一塊となれり。やがて長州侯は萩より山口に移りて戰備を修し、幕府は第二の征長軍を起し、五月の末には大軍既に大阪城に集まれりと聞えしかば晉作一詩を賦して曰く、

赫々東藩八萬兵。　襲來屯在浪華城。
我曹決死果何日。　笑待四隣聞砲聲。

防長二州の士氣は斯くて大に振ひしが、此頃乃木希典は父の許を得て始めて萩の明倫館に學び文學寮に在りて文武の業を修めけりとぞ。當時明倫館にて教授の任に當りしものは西洋兵學には村田藏六あり。漢學には岡村簑齋あり。共に少年なりし希典に精神上の感化を與へしものゝ如し。村田は嘗て鎭西に遊び廣瀨淡窓の塾に遊び、後浪華に行きて緒方洪庵に學びたれば學は固より和漢洋を兼ねたり。江戸にて幕府の藩書調所、講武所などに出仕したるともあれば眼界濶大にして天下の形勢に通じたり。此人金佛の樣なる見苦しき顏の男にて、世事もなく、愛嬌もなければ嘗て醫業を開きたれども病人來らず。自身も醫師としては流行せざることを覺りて廢業したりしと云ふ。長州國論一變の後本藩に擢んでられ

て明倫館に入り西洋兵學を教授し戰鬪術門と云へる普國の兵書を譯して生徒に授けたり。希典も恐らくは此人より始めて兵學の新智識を得たるならん。此人は容貌愚なるが如しとも云ふ程の地味なる人にて人に向ひても學者ぶらず、議論の花を咲かすることなく、至て大人しき方なりき。されば藩の政府の會議に出でても、何時も人にやりつけらるゝのみなりしかば石州の戰に其武功の彰るゝまでは人皆之を侮り、醫者めが醫者めがと云ひしのみなりしとぞ。外撲訥にして、內聰明絶倫なりし此偉男兒は十七八歳の青年なりし希典に何等の好奇心を喚起せしめたりけん。當時を想像すれば一種の快感を覺ゆ。岡村箕齋は漢學者にして醇乎として醇なる尊攘家なり。此人の講義を聽けば懦夫も起ち、怯者も奮ひ、必ず王事に死なんとの志を立つるに至りしとぞ。此人々幕軍既に長州の四境に迫りし時に於て學窓に在りて文武の業を以て青年子弟を教育す。正に是れ陣中に經を講じ、休戰中に武を練るに異ならず。入りては忠臣義士の節義を說き、出でゝは劍を揮ひ、銃を放つ。坐して學ばんとするものは起つて行はんとする所なり。

其學問の親切、着實なりしことは此に說くまでもなかるべし。

（九）長州四境戰爭。希典小倉表出陣の事

防長二州の　武士は　外に雌伏を
粧へど　內は勇氣に　みちみちて
引て放さぬ　梓弓　春の狩野に
若鷹の　唯だ一擊の　機を待つ
ゆゝしかりける　其樣は　世の喝采を
博しけり。　それに引かへ　幕軍は
大將軍の　威を假りて　外の虛勢を
示せども　內に軍の　力なく
聲と形と　ばかりにて　壓倒せんと
したれども、　己を知りて　敵を知る

智略にたけし　長州は　兵營の塵
清くして　旗も動かず　鼓さへ
鳴らすことなく　泰然と　靜かに敵を
待ちにけり。　困うじ果てたる　幕軍は
兵を出して　一年を　空しく過ぎし
其後に　牛の歩に　さも似たる
遲々綏々の　攻仕度。　慶應二年
六月に　始めて開く　砲門の
彈は眞の　彈にして　實戰とこそ
なりにけり。　待ちに待ちたる　長州は
四境に敵を　引受けて　しかも恐れず
たじろがず。　提封五十　萬石を
此一戰に　賭けよとて　勇み進みて

戰ひき。　靜かに　坐して
客兵の　來るを待ちし　長州は
朝氣銳く　士氣振ひ　其勢は
岩はしる　水の出ばなに　殊ならず。
暮氣につかれし　幕軍は　客地に慣れず
士氣散ず。　此戰は　かねてより
世の豪傑の　預じめ　思ひし如く
長州の　勝となりけり。　かくてこそ
二百六十　有餘年、　柳營の名の
いかめしき　覇者の權威は　地に墜ちき。
二十に足らぬ　若人の　乃木希典も
此時よ　先輩の士に　從ひて
書卷を拋ち　銃を取り　海を渡りて

豐の國　小倉表の　戰に
武功ありきと　人は言ふ。

希典、明倫館に學びし時、幕府は再度の長州征伐を聲言したれども、其實十分なる戰爭の準備もなく、其上薩藩は此戰爭には名義なしと抗辯して兵を出さず、其他の諸藩にも異論多く、譜代の小藩を除きては幕命の如く出征するものも少き模樣なれば幕府は恰も太刀を拔きて上段に搆へたれども、それを打ち下すこともならぬ程の窮境に陷りたれば虛喝を以て長州を威嚇し、謝罪の名義を立てさせて穩便に片付けんとしたれども、長州は國論旣に一決して更に動搖せず、一步も讓る氣色なかりしを以て、幕府も其處置に困うじ、此上は征討の外ある可らずとて慶應元年五月十三日將軍長州征伐を聲言して江戶を出發したりしより足掛十四ヶ月にして同二年六月始めて軍艦を以て長門周防の沿海を砲擊し、周防大島郡に攻入りたり、是を戰爭の始として長州人の所謂四境戰爭となりたれども、幕軍は全く成功せず、長州軍却て攻勢を取り、天下始めて德川氏の能く爲すことなきを知りたり。斯かりしかば希典も固より學窓に安んずべきに非ず、書卷を抛ちて從軍し、高杉晉作の部下となりて小倉戰爭に參加し、いさゝか負傷したりと云ふ。希典此時十八歲なり。是をその初陣とす。高杉は此年二十九歲なり。高杉は奇癖ある人にて大の天狗なり。何人も眼下に見下して之を漫罵し、殆んど眼中人なきが如し、氣宇濶達にして細事に拘々たらず。膽略あり。事に臨みて惑ふことなく、機を見て動き、奇を以て人の意表に出づ。小倉表の戰にも薩州の使者村田新八と色々話などし、へた〳〵と笑ひながら氣を付け居りしが敵は肥後の兵などにて強かりければ晉作下知して酒樽をかき出し、戰場にて開きなどして戰はせ、遂に之に勝ちたる從容不迫の氣象、人の及ぶ所に非ずと當時目擊者の一人たりし坂本龍馬は記したり。斯樣なる先輩に從ひて初陣したる希典は最も善き兵學校の敎育を受けたるものなりと謂ふべし。我等は親しく希典に會して當時の光景を聞くを得ざりしを遺憾とするのみ。

（一〇）希典伏見の兵營に入りて佛式の操練を學ぶこと

去歳は王師　我國に　迫り來れり。
今朝は　孤劍をさげて　他郷にぞ
戰ふ身とは　なりにける。　昨日の淵は
今日の瀬と　かはる浮世は　夢の如、
たゞかはらぬは　大丈夫の　國に死なんの
志。　千辛萬苦を　覺悟せし
王政復古の　業はしも　時勢の潮の
足早く　思の外に　はかゆきて
やがて維新と　なりにけり。　官賊の名は
異なれど、　誰れか王臣　ならざらん。

德川內府　恭順し　奧羽の兵に
戰志なく　時を得たりし　勤王の
諸藩は勝を　ほこりけり。　さはさりながら
兵は猶ほ　火の如くなり、　人を燒き
燒きて已まねば　自らを　燒くものなりと
古の　かしこき人の　言ひけるは
誠なりけり。　その昔、　元弘建武の
御世なりき。　武士の力を　借りたまひ
王政復古　したれども　驕兵の威
つよくして　耀き出でし　天日も
再び雲に　蔽はれて　世は尊氏の
世となりぬ。　史の鑑は　眼のあたり
武功にほこる　丈夫兒を　規律正しき、

ものにして　私鬪に　怯ぢて
公戰に　いさむ勇士と　するまでは
治らぬ世と　憂國の　眉ひそめける
大村は　此事をのみ　只管に
思ひ惱みて　さま〴〵に　未來を思ふ
計畫　國を治むる　良策も
人に知られず　惡まれて　末路悲しき
英雄の　身は朝露と　消えにけり。
されど遺せし　其業も　其教へたる
弟子も　國の寶と　なりにけり。
その弟子の　一人なる　乃木希典は
純忠の　勇士となりて　今の世に
香ばしき名を　止めけり。

長州の四境戰爭に勝ちしより幕府の威信忽ち地に墜ち、間もなく王政復古となり。維新の大業此に成れり。是れは維新の諸豪傑に取りても意外の大成功にて、かくまで早く埒明かんとは彼等と雖も豫期せざりしことなり。長州の俊傑桂小五郎（木戸孝允）は其時の感情を七言絶句に作り

去歲王師迫㆓我境㆒。今朝孤劍入㆓他鄉㆒。

回頭世事渾如㆑夢。一片依然男子腸。

といへり。彼等に取りては誠に夢の樣なる僥倖とも思はれしことなるべし。然るに討幕の業は斯樣に思の外早く捗取りたれども、是は日本國を立直す大事業に取りてはほんの前藝と云ふべきものにて、是より後の仕事の方が實は骨の折れしことなり。其骨の折れし難問題の中にさしづめ當面の問題と云ふべきは討幕の大功を立てたる諸藩の士族兵の處分是なり。たとへば其頃薩藩の兵士の京都に居りしものは俸給少くして苦情を鳴らすものありしかば西郷隆盛、大久保利通の兩人相談し增額の相談をなしけるに參謀伊地知正治、それは宜しからぬことなりとて

同意せず、其事自ら士卒の間に漏れ聞へしかば、伊地知は惡むべき男なりとて其外出の折を窺ひ、道に要して亂打し汚溝に投じたりと云ふ。長州にては桂太郎、第四大隊、第一中隊の隊長を命ぜられしが此中隊は諸大隊の中にても最もあばれ者の多き所にて最初の隊長は部下が其命を奉ぜざるを憤りて屠腹し、第二の隊長は隊中に不服のもの多くして免職となりたり、桂は三度目の隊長を命ぜられたるものなり。此頃長州の諸隊は隊長を自選するの例多く此隊も藩の政府の命じたる隊長は氣に喰はずとて桂の前の隊長を追出し、桂をも排斥せんとしたりと云へり。一事は萬事なり、是だけにても驕兵の御し難きを知るべし。維新の諸豪傑、此事に苦心するもの多かりし其中にも兵部大輔大村益次郎（則ち村田藏六の事なり）は首として驕兵を規律節制の範疇に鑄り直し兵制を統一せざれば日本國の前途猶ほ危しとて、陸軍は佛國に倣ひ、海軍は英國に學び、全國劃一の制度を以て大改革を行ふべしとの論を建てたり。其論旨の歸着する所は維新の大功を爲したる諸藩兵の鼻梁を挫き、新式の訓練を之に與へ、其節制に服せず、若くは訓練に堪へざるものは之を解散せんとするに在りしかば異論紛然として起り、大村は惡まれもの丶中心となりたり。されど大村は東西の形勢、古今の得失を見貫きたる豪傑なりければ異論を排して其理想を實現せんとし明治二年を以て伏見にかたばかりの兵學校を建て佛式の訓練を始めたり。乃木希典は去年十月より本國豐浦藩にて報告隊の讀書掛と云ふを勤めけるが此時藩より選ばれて伏見の兵學校に入り諸藩の俊才と共に始めて西洋節制の兵學を學びたり。希典の履歴書に佛式操練傳習の爲め伏見御親兵兵營に入るとあるは此事なり。此事は希典に取りては眞に其生涯の運命を定めたる一時期と云ふべきものなり。仔細は其頃の薩長並に勤王諸藩の士族は自ら二の流に分れたり。一は則ち古風の壯士にして尊王の精神と武士の氣慨とに於ては敢て人後に落ちざれども、何分中央政府の政局に當らず、或は一旦政局に當りたれども意見合はずとて忽ち辭し去りしかば天下の大勢には割合に疎く、日本の世界に於ける位置をも辨へざるものなり。二は則ち常に中央政府に居て世界に於ける日本と云ふ大局より世事を見渡し、權力を國の中

心に集むる必要を覺り、其必要の爲めには私情を去りて公義に從はねばならぬと決心したるもの、並に其人々の部下に屬し、其心事を知りたる故に自然中央集權の味方たりしものなり。希典なども若し藩にのみ居て世間に疎からば或は古風の壯士にして已みたらんも知るべからず。然るに二十一歳にて伏見に出で佛式の操練を學びて兵學の上より先づ西洋文明の畏るべきことを知るを得たるのみならず、諸藩の俊傑に交りて眼界も廣くなり、其上大村、木戸など云へる廟堂の中央集權論者より直接間接に世界の大勢と日本の位置とを教へられては豐浦の報國隊中に居て書物を教へ居りし昔とは識見も自ら殊なるに至らざるを得ざりしならん。雨の分水嶺に落る時は相去ろ寸に過ぎずとも一水は裏に落ち、一水は表に流れ、須臾にして千里を隔つるに至る。人の運命にも必ずかゝる分水嶺ありと知るべし。

さても大村は餘りに兵制改革に急ぎしかば、古風の壯士に惡まれ、此年遂に京都木屋町に於て長州人六人の爲に殺されたるのみならず、其主張したる改革を喜ばざるもの多く、翌年の春には長州に諸隊の暴動と云ふもの起れり。其事の概略を記さんに大村は其存生の時より各藩の大兵を擁して自立の形あるを憂ひ、木戸と計り、先づ長州より例を示すべしとて藩主に勸め諸隊を解散せしめんとしたり。大村の危禍を買ひしは之が爲なり。然るに大村の死にたる後も其遺鉢を繼ぎし陸軍大丞山田市之丞（顯義）も大村と同論なり、木戸も固より其心なれば遂に解兵の事を斷行したり。此時長州諸隊には自ら維新の功勞を恃み、中央政府の官吏を輕蔑するものもあり、政府の改革沙汰を喜ばず古風の攘夷論を固執するものもあり、山口藩廳の命に從つて解散することを肯んぜず、遂に暴發して藩廳を圍み、當時山口に居りし木戸を索めて之を殺さんとし、兵を分ちて木戸の旅寓と覺しき所に迫りたれども、其日木戸外出し居りしかば辛うじて危險を脫し馬關に出でしが、兼ねて隊兵の暴發に同意せざりし諸隊長は此時既に長府に在り、東京よりの援兵も來りしかば、兵を出して暴徒を擊破し遂に之を鎭定するを得たりしが木戸は鎭定を待ちて歸東したり。乃木希典は此年二十二歳なりしが此年正月暴徒鎭撫の爲め歸藩し金古曾と云ふ所にて一戰し、二月伏見に歸營したりとぞ。

此戰爭は長州人の二に分れし原因となりたり。此時前原一誠は諸藩の暴動は宜しからぬことなれども、彼等は維新の功勞あるものにて其精神も立派なるものなれば、我等廣澤眞臣と共に歸藩し、今度暴發の張本と聞えたる大樂源太郎等を說諭し無事を計ふべければ此一事、總て我等に委任せられたしと云へり。されど木戸等の說にては前原は元來保守主義の人にて內心兵制改革を喜ばず、諸隊の不平にも同情ある人なれば左樣の人を遣し暴動の巨魁大樂などゝ善い加減の處にて妥協しては事態依然として改まることなく兵制を統一し驕兵を亡ぼすことは成り難し。是は前原を遣はさゞるに如かずと思ひしかば自身出張し兵力を假りて朝威を示したり。前原は此處置を不快とし、自身の西下する能はざりしは三浦梧樓、木戸の意を承けて三條公を說き自分の西下を抑制せしめたるに依れりと云ひ遂に三浦と絕交したり。後年前原の暴發したるは是が爲なりと云ふ。是は後文に關係あれば筆の尋に記し置くものなり。

(二) 乃木希典大義親を滅すこと

晴れては曇る　さみだれの　空にも似たる
人心。　勤王無二の　豪傑が
多年の宿志　成就して　世は王政の
世となれど、　前門に虎を　防げども
後門に狼　入ると　古の
書に記せし　諺を　眼のあたり見る
世のさまや。　全國の士族　四十萬戸。
其大半は　しづやしづ　しづのをだまき
くりかへし　古を今に　なさんとて
進歩を呪ひ　文明を　惡むやからの
多ければ　謀叛の沙汰も　まれならず、

まだ其頃は　國の根の　ゆるぎ易くて
世の人の　思ふ所も　定らず、
惑ひまどひて　末遂に　身を誤るも
多かりき。　しかはあれども　希典は
時の政府の　俊傑の　苦心を知りて
干城の　武士の勤を　よく守り
大義に親を　滅ばして　兎の毛の末の
いさゝかも　悔ゆる氣色は　なかりけり。

希典は長州諸藩暴動鎮定の後、明治四年十一月陸軍歩兵少佐に任ず。其前月は吉田松陰の十三回忌に當りければ長州に於ては一類中にてその祭を爲し、玉木文之進は詩を作りて自身の所感を述べたり。

於不可爲猶且爲。　丈夫本領自如斯。　正名明分心曾信。
尊夏攘夷義豈疑。　世事紛々長慨歎。　人情浮薄日推移。
知否十有三年後。　頑鈍依然獨守癡。

と云ふもの則ち是なり。此詩は希典にも寄示せられたるべき歟。そは此時には文之進と希典とは獨り遠き親類たり、師弟たりと云ふのみには非ず、更に他の事情に依りて最も濃き中となりたればなり。仔細は文之進に一男児あり彦輔と云ふ。此彦輔は元治甲子の戰にも出陣したる俊傑にして維新の東北戰爭にも山縣有朋などゝ共に征討に從事したりしが不幸にして陣歿せり。老後に嗣子を失ひし文之進は是に於て希典の弟を養子とす、玉木正誼則ち是なり。かくて乃木、玉木は再び祖先の時の如く兄弟の親を爲したり。斯程の關係なれば松陰十三回忌祭典の事も文之進より希典に報じたるべく、斯樣のものを作りたりとて書簡の端になど記し越したることもあるべしと想はる。さて文之進の詩の意を按ずるに是は松陰を追懷すると同時に自身の感慨を述べたるものにてその「夏を尊び夷を攘ふ、義豈に疑はんや」と云ひたるにて玉木翁は此頃も猶ほ古風の尊攘論を忘れ兼ねたる人なりしことを見るべく、其次に「世事紛々として長へに歎息す、人情浮薄日

に推し移る」とあるにて翁が時世の進歩に對して悲觀する人なりしことをも察すべし。玉木翁が斯る感情を懷き居りしことは希典の生涯を考ふるには大切なる問題なり。玉木翁は希典に取りては恩師なり、父執なり、一門なり、實弟の養父なり。當時玉木翁と議論感情を同うするものは長州を二分して其一は則ち是なりと云ふも可なる程なり。松陰門下の俊才にして時の大官たりし前原一誠は其巨魁なり。希典は其人と爲りより云へば歴史と傳說に執着し、人情に動き易き人なり。されば一寸考ふれば彼も亦自然に前原、玉木の保守的感情にかぶれそうに思はるるなり。然るに希典が此際方向を誤らず、時の政府に忠誠なる軍人として善く其義務を盡くすに至りたる心理の解剖は當時の時勢を學ぶものには極めて有益なる問題なり。今其仔細を語らんに其時代には士族の勢力未だ衰へず、日本國にて國事を議論し、國事に盡力するものは士族のみなり。其上、明治四年に廢藩置縣となりて法律の上には藩と云ふものは無くなりたれども、舊藩の士族は猶ほ其城下に一塊となり、武士風の生活を營み、武士風の感情を懷き居りたれば封建の形は破れたれども、封建の實は猶ほ存在したりと云ふも可なり。但し藩主もなく、家老、用人もなく職制の上より士族を指揮、統一するものは、全く無くなりたれども、其代に維新の前後に功勞ありし先輩、長者たるもの依然として盟主の形を取りたれば其人の心得次第にて士論を動かすことも容易なり。中央政府の兵力が未だ强からず、鎭臺兵などは百姓、町人のみ恐るゝに足らずとて古風の士族は之を輕蔑したれば彼等には政府は此方の腕力次第にて何時にても取つて代り得べきものゝ如く見えたり。かゝる狀態なりしかば全國の士族四十萬戸、悉く是れ虎狼の類にして一たび其怒に觸るゝ時は直に國亂を惹き起すべき勢あり、此士族の暴力を打破し、眞の統一の政治を布かんとするが其頃日本政府の要地を占めたる、岩倉、大久保など云ふ諸俊才の志なりき。然るに古風の士族の目より見れば時の政府は徒らに外國に摸倣する輕薄の政治をするのみにて、國家の柱石たる士族を壓倒せんとするものなり。斯る政府は畢竟亡國の端を爲すものに過ぎずとて之を嫉視したり。されば前原一誠の檄文にも俗吏、士を見ること土芥の如しと云ひ、

政府士の常任を解き祿券を制す、其意不平を鳴らすものあれば之を討滅するに兵力を以てするに在り、四十萬の士族何の罪かあると云へり。古流士族の感情を遺憾なく發揮したりと謂つべし。此新古二流の思想の衝突は今日より見れば分界誠に明白なることにて多少事理を辨へたるものは別段惑ふこともなかるべく思はるれども其時代に於ては彼我の間を選擇して其是非を定むるは決して容易の業に非りしなるべし。されば故品川彌次郎子なども長州諸隊騷動の時は態度いさゝか分明を缺き、諸隊に對し同情の色ありしが爲に官途も同輩より後れたりなどゝも云ふなり。まして希典は親類一門の關係より云へば前原黨に近き人なり。其人と爲りより云へば寧ろ保守主義に傾き易し。さる人にして猶ほ善く時の政府の忠臣を以て始終し、誘惑に勝ち得たるは畢竟伏見兵營在學以來常に天下の中央に居り、天下の俊傑に交りたれば中央政府の苦心をも知り、世界の大勢をも學び、世の中は古流の士族の思ふ樣のものに非ずと覺り得たる爲なり。居は志を移し、養は體を移すとは斯ることをや云ふべき。扨も希典は明治四年歩兵少佐となりしより、明治五年には東京鎭臺第三分營大貳心得となり、明治六年には出でゝ名古屋鎭臺大貳心得となる。此年征韓論の爲に參議西鄕隆盛、後藤象次郎、板垣退助、江藤新平、副島種臣等辭職し、隆盛を親み尊びし薩摩の文武官員は刀筆の末吏に至るまで職を辭し、近衞師團の如きは殆ど空屋同然となる。同七年希典名古屋鎭臺大貳心得を免ぜられ陸軍卿傳令使となる。時の陸軍卿は山縣有朋なり。傳令使と云ふは官房に勤務するものなり。同時官房に勤務せしものには小澤武雄、秋月新太郎、田島應親などありき。是れ皆其時代に於て陸軍省中の俊才と呼ばれしものなりとぞ。此年佐賀の亂あり。同八年十二月十四日希典陸軍卿傳令使を免ぜられ熊本鎭臺第十四聯隊長心得を以て豐前國小倉に赴任す。時に二十七歲なり。小倉は九州の關門とも云ふべき所にて昔より軍事上重要の地點なりければ徳川氏の時代には此處に小笠原氏を封じて九州有事の日に備へたる程の事なり。希典の前任者は前原一誠の弟山田穎太郎なりしが、山田は兄と進退を同うせんが爲に辭任したりし故政府則ち希典を以て其後任としたるものなり。

今小倉を中心として其頃の世の有樣を察するに恰も噴火孔上に舞踏すると云ふ程の危險の狀態に在りしと云ふべし。先づ薩摩には西鄕隆盛を本尊としたる私學黨あり。肥後には學校黨、神風連ありて時の政府に不平を懷き、福岡にも西鄕黨あり、秋月にも征韓論に志を得ざる志士あり、馬關海峽を超えて長門に入れば、萩に前原一誠あり、明治七年以來同志三千人と稱して防長二州に雄視し、縣官も其鼻息を仰ぐ程の勢なり、四國には民權論盛んにして土佐は其中心なり。何れを見ても不穩の空氣に滿つ。凡そは是れ皆不平士族の其所を得ざるものなり。今日の士族は平民と何の殊なる所なければ其不平論は單に議論に止まり、別段恐るべきものに非れども其頃の士族は封建時代の餘習未だ去らず、平民に對しては猶ほ威權あり、其上禁刀令の未だ布かれざる世なればいづれも武器を携帶したり。されば之を正式の兵とは云ひ難けれども變則の軍人と云ひ得べき程の武力なきに非ず。中には維新の時官軍となりて實戰に從事し戰場の駈引も心得たるものあり。左樣の不平黨の中心に立ちて一個の兵營を守りし當時の希典は恰も敵前に城廓を構へたるの感ありしなるべし。然るに希典が赴任したる後、或日舍弟玉木正誼、微行して小倉に來り、希典に面會したり。玉木正誼は其頃未だ二十前後の青年なりしかども前原一誠の參謀とも云ふべき位置を占めたれば來り兄を說き、一誠に同意せしめんとしたりしものと思はる。當時此の兄弟の間に如何なる談話の交換せられたるやは詳ならざれども、察するに正誼は前原の志を述べ、時の政府の政策を攻擊し、天下の形勢既に大變の時機に會したり、政府は既に公議輿論の敵となりたれば有志の諸藩士一呼せば其顚覆は日を期して待つべし、阿兄に於ても今より其心得あるべき歟など云ひて希典の決心を促したるものならん。正誼は愛弟なり、其養父の正韞は希典の恩師にして前原の親友也。希典もその人々に背くは情に於て忍びざる所ありしなるべき歟。さる弱點を察したれば正誼も來て其兄を誘ひしものと見えたり。されど希典は愛弟の遊說を斥け其不心得を諭したれば此に大議論を生じ、互に其說を執て屈せざりしが正誼は阿兄の志、轉らすべからずと見てければ、さらば暇申さんとて萩に歸りたり。希典も是ぞ今生の別な

りと思ひければ弟の迹を慕ひて馬關に至り、同地にて兄弟水盃を取交し涙を揮ひ袂を分ちしと云ふ。兄弟の情は私なり、官事は公なり。公私の間に惑ふ所なかりし希典の態度は誠に明白なるものなりける。間もなく熊本に神風連の騷動ありて熊本鎭臺司令官陸軍少將種田政明、熊本縣令安岡良亮等殺さる。時に明治九年十月廿四日なり。之と同時に前原一誠、萩に據りて兵を起し、十月二十五日には秋月藩の壯士暴擧の事あり。希典此時小倉を警備し、十月二十七日營所の兵を出して秋月の暴徒と戰ひ、之を鎭定せしむ。萩に於ては前原戰敗して脫走を計りしとき玉木正誼單身刀を揮ひ官軍の前面に進み丸に中りて死す、前原等間もなく出雲に於て捕縛せらる。玉木文之進は前原の事に預らざりしかども義を重んじて祖先の墓所に至り割腹して死にたり。忠義の爲には親族一門を顧みざるは日本武士の特色なれども恩誼父に均しき師を殺し、愛弟を失ひたる希典の心中如何ありけん、思ひやるだにあはれなり。正誼既に死にければ文之進の後は彥輔の子を以て其家を嗣がせたり。今の陸軍歩兵少佐玉木正之則ち是なり。

（一三）西南戰爭。希典武功の事

佐賀の江藤は　先づ破れ　神風連に
神風の　助もあらず　秋月の
月の光の　暗くして　萩の亂も
しづまれば　世は太平に　かへれども
衣を拂ひ　故郷の　山に入りける
西郷は　薩摩隼人の　二万騎に
大先生と　仰がれて　霧島山の
春の花、　鹿兒島灣の　秋の月、
野くれ山くれ　狩くらし　身は鹿猿に
伍しながら　雲を待ちける　龍の如、
時の變をば　窺ひぬ。　されば時勢を

憤り、　日本國の　其中に
鹿兒島と云ふ　獨立の　國ありけりと
歎きつ、　時の政府を　嘲けりし
人も多かり、　鹿兒島の　事定らぬ
其中は　明治政府の　鼎しも
輕しと云ひし　人もあり。　勢此所に
極りて　隆盛反旗を　ひるがへし
古今稀れなる　大亂と　なりける時も
希典は　御國の爲に　奮戰し
寡兵を以て　大敵と　戰ひしかば
一旦は　軍旗をさへに　奪はれき。
されど武運は　めでたくて　勇名高く
世に聞へ　人に稀なる　戰功に

世の譽れをぞ　得たりける。

西南亂（一）　希典植木の戰に聯隊旗を失ひしこと

明治七年の江藤亂、明治九年の熊本、秋月、萩の亂は申さば西鄕亂の序幕にして其世の勢、鹿兒島の片付くまでは天下の事未だ定まらずと云ふべき有樣なりき。されば前原騷の鎭定したる年の十一月九日に熊本鎭臺司令長官を命せられ新たに希典の上官となりし陸軍中將谷干城も、其年十二月二十二日熊本より書を鄕友に送り「芋（薩摩を指す）も先頃は一時動搖いたし候樣子に御坐候得共先靜謐に歸し候由なり。孰れ他日の大患は芋に可有之と被察申候」と云へり。然るに薩人の勃發は「孰れ他日の大患は芋に可有之」などゝ悠長に考へ居るべき程の間隙もなく、谷の赴任したる後僅に三月を隔つるのみにて明治十年二月二十一日、薩軍は肥後國川尻に於て熊本城兵と戰端を開始し、此に所謂明治史上の大內亂とも云ふべき西南戰爭の端を發したり。敵は古今無双の英雄、西鄕吉之助なり、

之に從ふ兵士は維新の戰爭に實戰の經驗あり、若くは私學校にて訓練を積みたる剽悍決死の薩摩隼人二萬人なり。其上其頃は時の政府に志を得ざる諸縣の士族、何れも廟堂の政策を誹謗し、何事ぞあるならば竿を揭て起たんと待かまへたるものも多かりしかば、薩軍の風向きだに善からんには九州一圓叛軍となるべき勢あるのみならず、四國の土佐、出羽の庄內などは遙に西鄕に應援せんと密議を凝らしたるものもあり。東京の官吏中にも此騷のドサクサ紛れに政府の顚覆を企てしものさへありし程なれば此戰爭は明治政府に取りては實は其死生存亡を決すべき危機にてありしことなり。さても熊本鎭臺司令長官谷干城は二月上旬、薩軍旣に叛旗を飜へしたりと聞きしより、九州諸縣の動靜を考へ、此上は攻守共に熊本城を根據として官軍の來援を待つの外なし、戰爭には未熟の鎭臺兵を以て四方に走動して腹背敵を受け、手も足も出ぬ樣になりては熊本城も敵の手に落つべく、さるとありては九州一圓を賊にする結果ともなるべしとて胸中早くも戰略を決しければ二月十三日に訓令を小倉の第十四聯隊に與へ、全軍來りて熊本鎭臺に合すべしと命じたり。希典は此訓令を受けざりし前に筑後久留米は要地の事なれば小倉より同所に出兵し、豫め不虞に備へんと思ひ、其趣を鎭臺に通じたれども其議は行はれざれき。然るに禍機愈迫り、熊本出張の命を受けしかば、出戰準備の間に合ひし小倉聯隊第一大隊左半大隊のみは十四日に出發して熊本に向はしめ、自身も其日熊本に入城したり。やがて城中に於て軍議あり。其軍議にては小倉聯隊は兼松より山鹿に出で城外より、城兵と相應じ、賊軍に當るべしと云ふことに決したれば希典は同十六日熊本を發し、十七日福岡に着し、福岡縣令渡邊淸と諸事打合せ出戰の仕度をなせしに、谷中將より更に電信にて命せらるゝ所ありしかば同地屯在の第十四聯隊第三大隊にも出動を命じ、同十九日には小倉營所の餘兵も出陣し、共に熊本に向ひたり。同二十二日植木の激戰にて希典が聯隊旗を賊軍の奪ふ所となりしは此行軍中の事なり。希典の自ら語る所に依れば其戰況左の如し。

其月十七日、希典は福岡に歸り、縣令渡邊淸と協議を遂げ、尋で電信局に於て、

谷よりの命に接し、福岡屯在の第十四聯隊第三大隊にも順次出征の準備を爲さしめたり。小倉營所の餘兵も、速に出征の途に上るべき筈なりしが、其夜、エンピール銃を馬關に在りしスナイドル銃と交換すべき筈なりしに間に合はず、日を曠うして其至るを待ちたるも、斯ては軍機を誤るべしとて同十九日、午後

悉く征途に上れり。此兵は則ち第一大隊の右半大隊、第二大隊の左半大隊にして大尉青山朗之を引率したり。斯くて各隊進行後、一時間を經て、スナイドル銃馬關より到着したるため、多數の人夫を使役し、第四中隊をして護送せしめ、疾驅して、エンピール銃と交換す。希典も福岡を發し久留米に至りしが、同二十日、馬場大尉熊本より來り谷の命を希典に傳へたり。其の命令に依れば最初の軍議を變じ全隊路を高瀨に取りて强行入城せよとのことなりき。是に於て希典は更に諸隊の行進を促がし、第三大隊の第四中隊を彙松に進め、山鹿に據て本隊に應ずべきを命じて先發せしめたり。

同二十一日、希典は津下少佐をして、第一大隊右半大隊を率ゐて彙松より山鹿に向ひ、吉松少佐、青山大尉をして、南關より高瀨に進ましめ、自身も久留米を發して、夜、南關に着したり。同二十二日昧爽、希典は松田軍曹に付するに四名の兵卒を以てし、先發急行して植木に至り、敵情を偵察せしめ、第三大隊の右半大隊は、南關を發して高瀨に至れり。然るに此日は天氣清朗なりしかども前日來の急行と雪後の泥路との爲に、兵士大に疲勞し、多くの足痛者を生じたりしを以て、希典は、兵士をして或る寺院の階段を登らしめ、其健否を類別し、井上軍醫と謀り、足痛の兵は、温めたる酢を以て足を洗はしめ、疲勞したるは、食前に酒を與へ、一時安眠したる後に發せしむることゝし、壯健の兵約六十餘名は、食後に酒を飲ましめ、先づ之を率ゐて、午後一時、植木に向て出發す。是は早く植木を占領せんとする戰略上の目的ありしが爲なり。斯くて希典の植木に入りしは、同日午後六時の夕景なりしが、大隊長吉松少佐は西南の驛端に於て、散兵を配置したり、其兵は一箇中隊に滿たざるものにして僅に六十餘名許なりき。適ま土民、敵の爲に炊ぎたる糧食を他方に運搬せんとす

るものあり。則ち之を奪ひて饑を療するを得たり。未だ幾ならず、薩軍より銃聲の發するを聞く、是に於て希典は先づ兵士に命じて濫に發銃することなからしめ、賊の接近するを待ちて、之を撃たしむることゝしたり。是は徴兵令施行後、初めての兵士にて、訓練未だ足らざりしのみならず、一には彈藥の缺乏せんとを恐れたるが故なり、此時各方面より、兵士參々伍々來り會したれども、我全軍の兵數は二箇中隊に足らざる程なりき。薩軍の兵力は分明ならざれども、頗る少數なりしが如く、やゝ久しく交戰せし後、彼は一時退却するに至れり。

薩軍一旦退却したる後半時間餘も過ぎしと思ひし頃、彼亦鼓譟して來れり。其兵勢は、前に比して、頗る優勢なり。斯くて賊は白兵吶喊して本道の戰線に逼り、三面より猛進して植木の市街を包圍するに至れり。是に於て、希典は勢の持久す可らざるを知り、先づ軍旗を黒羅紗の袋に裹み、之を捲て少尉河原林雄太に負はしめ、死傷者及彈糧は、順次に人夫をして後方に運搬せしめ、殘餘の彈糧に火を放ち、烟の上るを合圖とし、戰線を左右に開き、右は吉松少佐、左は渡邊中尉之を指揮し、千本櫻今日猶一株の老櫻を存すに背進し、防戰の位置を撰定すべしと命じたり。此夜は恰も舊暦の十三夜にて月色玲瓏、微風だも起らざる良宵なりしを以て、希典は櫟木、山口兩軍曹をして、火を彈糧に放たしめたれども、屢ば放ちて、屢ば滅し、中々焚付かず、後には障子其他のものを集めて辛ふじて火を點するを得、其火の起るを待ちて背進したり。

斯くて我軍は千本櫻に集り、隊列を檢査したるに、河原林少尉一人のみ見えざりしかば、希典は急に傳令使を馳せて、吉松少佐に問ひしに、少佐答へて曰く「本道最後の激戰に、河原林少尉は、其部下と共に刀を揮て突貫したれば、或は敵中に陷りたるやも知るべからず」と希典は軍旗を敵手に委したるを憤り、返戰し之を取返さんとしたりしが、衆皆之を諫止し、強て希典を昇ぎて、僅に退却したり。

此夜十一時頃、寒光天に滿ち、月影冴へ渡りしとき、希典等は木葉に着したり。

當時兵士の疲勞甚しく、飲食をすら忘るゝに至りしものあり。暫して渡邊中尉來り會す。希典中尉に河原林少尉の事を問ふ、「知らぬ」と答ふ。是より先き第三中隊長津森大尉、高瀨より來る。希典因て此隊を以て、七本村の隘道に據り賊を拒ぎ、河原林少尉の所在を搜索せしめたれども、終に植木に入ることを得ざりき。

初め希典の背進せし時、後に吶喊の聲を聞きたり。是は薩軍の聲に非ず、味方の聲にして是ぞ河原林少尉が、八名の部下と共に敵陣に突貫したるものなりき。少尉の死體は、植木驛端の左の崖下に在りしと云ふ。

河原林少尉は二十五六歳の青年士官にして、その人と爲りは沈着にして大膽なり。誠に好箇の軍人なりき。

之を要するに此時賊の先鋒は熊本以北に向ひ居りしを希典は賊の未だ北進せざるに先ちて熊本城に入らんとし、熊本城を去る三里の植木に於て優勢なる敵に會し、月下に激戰し、背進の際に當りて軍旗を敵に委したるものなり。猶ほ當時、此戰

争に參加したる杉原勝臣氏の手控と云ふものあり、當時の戰況を見るべきものなれば下に抄す。

午後七時に至り賊兵の一團吶喊して本道の戰線に迫る。我軍始めて之に應じて射擊を開始したるが此戰最も猛烈を極めたるより賊兵其犯すべからざるを覺り、漸次退却すること數町我兵之を追擊し將校も亦傷者の銃を執り戰を援けて夜の九時に至りたるが、此時賊大に加はり百兵奮進吶喊雷の如く復た本道の戰線に肉薄し我兵防戰最も苦む。少尉試補板垣義重重傷を負ひ、彼我相混ず、紛戰亂鬪、死傷甚だ多く、各線頻に急を報ず。敵兵愈增加し、左右翼を張て、漸次植木市街を包圍し、飛彈縱橫、守兵の背後を射る。是に於て到底持久すべからざるを察せしも、本道の敵を拒止せざれば退却の策行ふべからざるを以て河原林少尉に軍旗を捲て之を負はしめ、近傍に在る兵卒十餘名を附し、策を授て之を本道の押に增加せしめ、火烟の上るを期とし戰線を左右に開いて背進し、千本櫻の近傍を收容部隊の陣地として防戰すべきを約す。既にして九時四十分

背進を始め、千本櫻に集まる。敵亦敢て尾擊せざるなり。是に於て隊列を檢したるに河原林少尉未だ來らざるより、乃木聯隊長之を衆に問ひたるに、本道最後の激戰中少尉刀を振つて率先して進むを見たれば、或は敵中に斃れたるに非ざるかと云ふ。乃木聯隊長之を聞き驚駭し大呼して軍旗を失ふ何の面目か復た生還せんや、返戰して軍旗を奪還せん。衆我に從へと云ふ。此時奮つて戰はんとする者と諫止する者と相半せり。衆泣て聯隊長を擁止し、後事を圖らざるべからざるを云ふ。此時第三中隊長津森大尉高瀨より來着したるより直に其隊をして七本村の隘道を拒守せしめて更に敵情を探り河原林少尉の所在を搜索したるも遂に其死骸も得ず戰線に前哨を配置し、其他の部隊は木葉村に村落露營をなす事としたり。

此時河原林少尉を殺して聯隊旗を奪ひ去りし薩人岩切正九郎なる人の自ら語る所に依れば當時の事情左の如し。

岩切は薩軍第四番大隊第九小隊に編入せられ、小隊長伊東祐高（通稱直二）の部下にて押伍の役を勤めしが、熊本城攻圍の初日午後三時過ぎ、植木へ向て進軍の令下りし爲め、直に途に上り、薄暮向坂と云へる處にて、官軍と衝突し、戰鬪夜半に及びしが、兩軍亂鬪混戰すること、數回、岩切は官軍の中に突入し、萬死中に一生を得たれども、部下と相失し、味方の所在搜索中、畑地の間に人語を聞きしを以て馳せて、敵歟、味方歟と窺ひつゝありしが、突然後より薩軍の夫卒來て、後方を指し、低聲にて敵來れりと告げたり。岩切則ち直ちに後を振向き、拔刀のまゝ馳せ向ひしに、前面拾數間にして、官軍の一士官を認め、之を殪したり。但し亂軍中の事にもあり、且此夜月色朦朧たりしため、岩切はその殺したる官軍士官の少尉なりしか、中尉なりしかを判ずる能はざりしと云ふ。岩切則ちかの士官の佩劍と胴卷にしたる袱紗包の手帳のやうなるものを外づし取り、仰向けに倒れし死骸の、少しく橫になりし時、士官の背腰に挾みたるものなりしにや、二尺許の旗の卷きたるが現はれたり。岩切之を分捕したるに適ま其所に薩軍の夫卒來れり、岩切は、彼に自分所屬部隊の夫卒なりやと問ふ。「然

り」と答へしかば、岩切之を信じ、其者にその分捕品を携へ居るべく且死にたる士官の「ポッケット」に在りし時計を取り來れと命じたり。然るに岩切は死にたる士官の傍にも敵影ありと思ひをりたれば「尙、敵兵あらずや」と、近方を捜索したりしが、約拾數間にして、廣き街道に出で、また約二丁許も南へ行きしに、岩切所屬部隊の一部此に休憩し「睡りには勝てぬ、敵の來襲は恐れぬ」と云ひながら鼾をかき居たり。

此時は既に夜の十二時過ぎなりしが、距離遠からぬ人家に火災起り、岩切は烟の中に官軍の參々伍々敗走するを見たり。其火災の植木驛に起りしものなりしことは岩切も其翌々日薩兵進軍の途次、通過の時之を知りたりと云ふ。尋で四面銃聲收まり戰罷む。岩切は此夜、植木を距る一里半許の一部落に宿したり。翌朝、岩切は休兵して、昨夜分捕品を授けたりし夫卒を捜索したりしが適ま伊東隊長來り、岩切に向ひ「其旗は村田三介の隊に在り、足下は何故に、最大の名譽ある軍旗を抛ち、之を他隊の夫卒に渡したる乎。抑も軍旗の分捕は獨り足下一人の名譽のみにあらず、全隊の名譽なるに無慾にも程のありたるものなり」と滿面に朱を濺ぎて、岩切を叱責したり。伊東は、岩切の父執にて二人の間は殆ど父子の如くなりしかば伊東は遠慮無く岩切を叱したるものなり。岩切は憤然として「余は亂軍中に在りて、一死を覺悟し居り、殊に押伍の役に居りながら部下を見失ひ、戰地にて進退を同うするを得ざりしを遺憾に思ひ、自身の名譽、隊の名譽などを考ふるの餘地なかりき。余とてもさほどに無慾のものに非ず。左樣に叱らるゝにも及ぶまじ」と、抗辯したるに、伊東は「御身も亦岩切の子なりけり。默つては居らぬ男なり」とて俄に其怒を霽らし「昨夜の働は天晴なりき。又何處へか進軍し、立派なる戰功を立てられたし」と云ひ、同時に、何時進軍するも差支へざる樣、戰鬪準備を整ふべき旨押伍のものに命じ、村田三介に逢ひ分捕品の取戻しを談判せんとて、伊東は其儘立去りたり。

此日夕景に及び、伊東は再び岩切に會し「村田も同鄕里の人物にて、余等に緣故の遠き人に非れば、丈夫の雅量にてあの旗を我隊に讓らんには好漢なれども、

彼は彼此言ひて渡さず。少壯の時代より一度否と言へば、容易に應とは言はざる中々剛腸の人物なれば彼が遣らぬと言ふ上は到底我隊に取戻し得る望なし」と語りたり。

岩切の官軍士官を殪したる場所は、熊本より植木に向ひて左傍街道の附近なる畑地にして、植木驛に接近したる處なりき。此時岩切は、味方を搜索して却て其士官に逢ひしものなり。その士官も、同じ境遇に陷いりたるものなるべしと思はる。當時岩切は、前面に拾數人の一群あるを認め、窃に之を窺ひしに夫卒は岩切に「敵來れり」と告げしかば、岩切は後方へ振向き「敵は何處に在りや」と、一段低き畑地を望み、拔足にて徐歩する折、其低地の藪中より、頭を擡げ左顧右眄しつゝある漢子あり。岩切が敵ありけりと待設けたりしとき、偶然にも頭を擡げたりければ一刀にて切倒し、低地に飛び下り、佩劍其他を分捕したり、岩切は當時其所に在りしは士官一人なりしや、將た引率の兵ありしやを記憶せずと云ふ。

或るとき伊東は、同志と會宴の席上にて、談、植木戰爭に及び、「岩切は、聯隊旗を分捕して、村田の隊へ渡したり。當時、村田も我隊に渡さぬとは言はざりしが、遂に取戻すを得ざりき。されど自分にせよ、岩切にせよ、村田との間柄は同郷里に成長したるものなれば何れにても同じことなり」と言ひたりとぞ。是は眞の說と見えたり、されば此戰に薩軍勝に乘じて植木の町に入り官軍の本營らしき民家を搜索せしに、床の間にかの聯隊旗が立かけありしを見て、善ものを得たりとて大に喜びたりなど云ふは、無根の虛談なるべき歟。

西南亂(二)　希典聯隊旗を失ひしを以て一生の恥辱と感じ居たること

此聯隊旗は陸軍少將野津鎭雄奮戰して取返したりと云ふ說ありて、其頃は東京にては其趣を錦畫にして賣出したるものもあり、又之を取返したるは野津少將に

非ず、希典自身なり、希典、軍旗を奪はれしヿを憤慨し、僅少の手兵を引連れ、敵陣に驀進し幾多の犧牲を拂ひ、遂に之を取戻したりなど云ふ說もあり。されど是皆爲にする所ある虛談なり。希典一生の間此事を苦にし其潔き自殺の原因ともなりたる程なれば今に至りては英雄の眞面目は唯だ正直に畫くべきのみ。扨も此軍旗の行方如何んと尋ぬるに此戰に於て薩軍の隊長たりし村田三介は聯隊旗を得て大に喜び、熊本城責の前にかゝるもの得たるこそ大慶なり、早速西郷先生に御目に掛くべしとて特使を以て之を西郷の本營に送付したるに、西郷の機嫌斜ならず、やあ善きものが手に入りたり、之を熊本城の官軍に見せ小倉の兵敗走して援軍の望絕へたるを示し、臆病なる鎭臺兵の膽を冷しくれんとて長き竿の先に結び付け、花岡山の上に飜へし、壯士に鬨の聲を揚げさせて、城中の賊之を見よとて嘲弄したり。城中にては始は敵の詭計にてさる僞物を作り我を欺くものなりと思ひしが、日を經て後漸く眞のものなるを知り、扨は小倉の援兵は望なきかとて、流石の勇士もいさゝか心細く感じたりとぞ。希典は旗手還らず、聯隊旗の行衞不明となりしかば早速待罪書を參軍山縣有朋まで送りしが其儀に及ばずとの指令を得たり。されど何でふ忘れてあるべき、日々夜々我聯隊旗は如何になりけん、と戰場にまどろむ夢の中にも、其事を思ひ出さぬ折もなかりしに熊本城、官軍と連絡を通じたる時、少佐別役成義より始めて薩軍の我が聯隊旗を花岡山に樹てゝ城中を嚇さんとしたるヿを聞き、扨は我聯隊旗は果して賊の手に落ちけり、さる上は一死を以て罪を謝せざるべからずとて、自殺の決心其表に現はれたり。別役はさま〴〵に慰めて聯隊旗既に敵の手に落ちたり。足下唯だ一死を賭して之を取返すべきのみ。同じ死ぬることながら、屠腹して罪を謝すと云ふのみにては唯だ死を潔うすると云ふ迄なり。それよりは功を樹て罪を償ひ、然る後に死にてこそ丈夫とは申すべけれなど切諫、諷諭つぶさに至りしかば、希典もやゝ思返したる景色なりしと云ふ。實際其頃の希典は死なんと思切たる有樣、同僚の眼にも餘る程なりしかば上官の谷少將も心配一方ならざりしと後に人に語りたり。然るに此聯隊旗を分捕したる薩軍の將村田三介は同年三月十一日鍋田の戰に戰死し

たりしかば其友人等此聯隊旗は村田の武功として誇るべきものなれば、村田家に藏めて其家寶となさすべしとて村田三介分捕の六字を其旗の白地に大書し村田の遺髮と共に鹿兒島なる未亡人佐和子の許に送りたり。其後官軍にては聯隊旗の處在を索めたれども久しく之を發見する能はざりしに、西郷等城山の露と消えし後十月に至りて遂に折田三之介なるもの丶密告に依り鹿兒島下方限警視署の手に之を收めたり。其事情は下の如し。

折田三之介は、元と東京の人にて、樺山資綱の妾の弟なり。此戰役に薩軍に從ひ、輜重部附と爲り、後、官軍に降り、またその輜重隊に屬せしが、官金窃取の嫌疑に由り、下方限警視署に拘留せられ、薩軍の將卒と同じく檻倉に在り獄中の談話にて、聯隊旗の由來を知り村田家に秘藏しありと密告したり。下方限警視署長は此密告に依り巡査を村田家に遣し、村田未亡人に尋ねたるに未亡人は『最早、疾くに之れを燒き棄てたり』と答へ、其事實を語らざりしかば、警官は、更に家宅搜索をなせしも之を見出すこと能はざりき。佐和子は、良八の志を體し、聯隊旗を官軍に返さゞるに決心したれば、初めは之を自身の肌にかくし居りしが、或は身體檢査に遇ふの虞あらんことを恐れ、之を蒲團の袖に收め、後には佐和子の實家大山家に移したるも、探偵益す嚴密なりしかば、夜に乘じ、蒲團と共に聯隊旗を後迫の枝次家に移したり。

下方限警視署に於ては、一方には、佐和子を召喚して之を詰問したるに佐和子は之に屈せざりしも、大山家は佐和子に自白すべきやう勸めしかば、佐和子も最初の決心を飜し、聯隊旗の所在を自白するに至りしなり。當時警視署にては『燒き捨てたとの答辯では、其筋にも御考がある、飽迄旗の所在を申さねば、警視署に拘留を仰付けるぞ』と、畏したり。此時は恰も三介の二男藤八の誕生後間もなきとにて佐和子は始には下女に嬰兒を負はせ、共に警視署の白洲に出で乳を哺ませながら、『疾くに旗は燒き棄てました』と答ふるのみなりしが、自身若し拘留の身となりなんには產れ落ちて未だ何事を辨まへざるものをば、自身と共に獄屋に連れ行かざるべからず。是は誠に忍びざることなりとて初一

念を飜へし、有體の儘に旗の在所を申立てたるものなりと云ふ。
此話は大方は誤なかるべし。其頃の警視署長たりし大塚某は聯隊旗は村田の宅に在りと聞き屬僚を從へ村田方に至り天井裏にて發見したりと自ら語れり。是も異說なれども、大同小異なり。いづれにしても聯隊旗が戰後に於て村田家にて發見せられしものたるは疑ふべからず、希典が遂に自身の手にて聯隊旗を取返さんとする志を達せざりしは明かなり。駿馬は鞭影にも驚くと云へり。武門の恥を知ること最も强き希典が是を終生の憾事としたることと思へばあはれなることなりける。

西南亂（三）　希典木の葉に激戰の事

さても二月二十二日の夜植木の戰は薩軍の大勝利に歸し希典は木葉に宿陣したり。此夜大雨ありき。明くれば二月二十三日拂曉、希典、先づ少數の兵を出して植木の方面に向はしめしに薩兵殺到し、我兵且拒ぎ、且退く、希典さらば此所に敵を引受けよとて木葉に於て兵を本道及び左右翼に分ち靜に薩軍の寄せ來るを待ち掛け、敵を三百米突まで近け置きて扨後に三面齊しく急射したりしかば、薩軍も此不意打に驚き一時は退却の勢を示したれども間もなく彼は上木葉を隔て、地物に據り戰線を占め兩陣相對峙するに至れり。山鹿に向ひし薩軍も途にて木葉の方に銃聲の起るを聞き忽ち其方向を轉じ木葉の背面を襲ひたり。此時青山大尉一中隊を率ゐて希典の軍に合す。然るに本道より攻め來りし薩軍の勢猛烈にして數ば官軍の戰線に突貫せんとする色あり、本道の主將少佐吉松秀枝より頻りに援隊の增援を求めけり。希典、此時は左翼の山腹に在りて薩軍の迂回運動を監視し居たりけるが吉松の援を請ふこと頻なりしかば山を下り本道の陣地に至り「今は足下に分つべき餘兵なし、たとへば餘兵ありとも、左右兩翼の援兵を要すること更に急なり、本道の兵さまで寡きに非ずと思はる。足下若し援兵なければ戰ふに堪へずとならば予請ふ其任に當りなん」と云ふ。吉松笑ひて「餘兵あらんには援兵を請はんと申したる迄なり。本道の事は決して御配慮に及ばず、貴殿は聯隊

長にておはせば全軍の指揮をなしたまへ、久しく此陣に居たまふべからず」と詞すゞしく言放ちたり。希典も寡兵を以て大敵に當り、一死を期して寸歩も退かざらんとする勇士の一言に感激し、さらばとて吉松の陣地を去りしに間もなく本道の方に當り「ワーッ」と云ふ鬨の聲を聞きたり。是なん吉松が其部下二十餘人と共に群がり來る薩軍の中心に向て銃槍突貫を行ひしものなりける。かくて心猛けかりし吉松も衆寡敵せず大傷を負ひ、其夜に至りて空しく戰場の露と消えぬ享年三十三歳と聞えける。此時薩軍の勢益す盛んにして官軍の右翼尤も苦戰したり。やがて日暮れぬ。官賊共に終日の大戰に疲れ、殊に賊軍は官軍が植木の敗北にも懲りず、思の外に陣地に執着して抵抗を續けたる勇氣を驚歎し、侮り難く思ひければにや夜に入りて少しく攻擊の手を弛めたり。希典は薩軍の勢、斯く猖獗なる上は一先づ退陣の外はあるべからずと思ひければ令を各中隊長に下し、月の未だ出でざる宵闇に乘じ右翼より順次に梯形を取りて背進すべしと命じたり。是れ此地既に守り難ければ本陣を石貫に移し、迫間川に沿ひ戰線を占め薩軍の進擊を其一線にて防遏し後圖をなさんと思ひたる故なり。斯くて其仕度をなし先づ右翼の退却を促し、陣形を轉せんとしたるに、此時薩軍數百人早くも木葉山を越えて我が後拒と定めたる一隊に切入りて、之を破り、正面の薩軍も此勢に乘じ、波濤の如くに寄せ來りしかば、希典、今は容易に退陣もなり難し、此の上は潰兵を後拒の陣地たる稻佐の高丘に集め此に死生、存亡を決すべしとて馬に鞭ちて其方面に進みたれども薩軍の狙擊繁くして殆ど面を向くべからず。日は暮れたり。雨はしと〳〵と軍服を濕すなり。砲火の煙、面に塞り、咫尺の間、彼此を辨せず。敵味方相混じたる白兵戰となり、はてはいざ來い、組んとて手を以て相搏つものさへあり。眞の苦戰となりてける。希典の馬は此時疲れて用をなさずなりければ主人を失ひたる吉松の馬に乘換へしに一丸その馬に中りしかば、馬は苦痛に堪かねて敵陣に飛入り、主なる希典は落馬したり。薩兵之を見て銃を揮て毆殺せんとす。伍長大橋と云ふもの身を以て希典を蔽ひ、少尉摺澤靜夫亦聯隊長の危急なるを見て返戰し數彈を蒙りけり。希典は此僚友の助に依りて漸く萬死を脫し、木葉

川を渉り寺田山に達することを得たり。此時既に退陣したる官軍は聯隊長の影の見えざるに驚き途中より引返せしに希典も追付きたり。人々喜びて希典の狀を見るに顏と云はず手足と云はず、打撲傷の爲に紫黑色の斑點を生じ苦戰の迹歷々たりしと云ふ。同廿四日は希典等は南關に引上げ、此所を守ること丶定めたり。希典少年の頃は體質も弱く、心もやさしく、臆病の樣子も見えしに今度の戰爭に大丈夫の勇氣を現はしければ、昔し伊達正宗の少年時代に氣の小さく見えながら後に無雙の勇士となりけるに似たりとて鄕黨の人々は其豹變を驚きしとぞ。

西南亂(三)　植木、木葉の戰爭は乃木一代中の大功名と云ふべきものなること

さても希典は植木にては聯隊旗を失ひ、その翌日木葉にては大敗し、南關に歸りし頃は其部隊は恰も羽折れ、翼の摧ける鳥の如く誠に氣の毒なる有樣にて自身も餘程心外に堪へざりしにや思詰めたる氣色面に表はれたりとぞ。さりながら其頃にも此戰爭の始終を考へ希典が植木、木葉にて薩軍と激戰したることは希典一代中の大功名と云ふべきものなりと賞讃したるものもありき。仔細は此時九州に於ては熊本の城兵を除きて官軍と云ふべきものは唯だ希典の統率したる第十四聯隊ありしのみ。官軍第一旅團、第二旅團の博多に上陸したるは二月二十二日にして其夜は希典植木激戰の時なり。第一旅團の博多を發し筑後の松崎に入り、第二旅團の福岡を發し太宰府に向ひしは同二十三日にして其夜は希典木葉にて敗軍す。第一旅團、第二旅團の筑後久留米に會せしは其翌日則ち二月二十四日なり。時間と距離とを以て之を計るに希典若し植木、木葉に苦戰し、薩軍の足をとゞむることなからんには官軍久留米に到達せざる前に薩軍既に兩筑を襲ふべし。筑前には秋月の殘黨もあり、福岡には西鄕の黨あり。薩軍若し二筑の境に入らば或は其蜂起を見たらんも知るべからず。かくては九州遂に鼎の如く沸き、鎭撫も難儀となるべきに希典が兎も角も寡兵を以て勇戰し、薩軍をして南關以北に出でざ

らしめたるは谷氏の熊本籠城と共に偉功と稱すべきものなり。但し薩軍は鎭臺兵の弱きことを思侮り、熊本城を陥るゝことは容易の業なりと信じ、熊本落城の上は天下の名城を何の苦もなく乘取りたりてふ虚聲を以て人心を鼓動せんと思ひしかば主力を此に集め全軍疾く進みて九州の要地を占むるに心掛けず、植木、木葉の戰勝を機會として直に大軍を北上せしめざりしを以て希典は死を免れ間もなく援軍來り薩人は攻勢を守勢に轉ぜざるを得ざるに至れり。此時、薩軍若し熊本城を外にして懸軍長驅、直に北進したらんには希典は恰も長湫の戰に於ける本多平八郎の決心に均しく第十四聯隊を犧牲として一刻たりとも薩軍の進みを遲くし、一寸たりとも戰線を守り、官軍が敵の正面に精力を集中するに都合よき樣に奮戰して命は御國に奉るべかりしなり。然るに官軍早く來着したれば希典と第十四聯隊とは滅亡を免れたり。是れしかしながら郵便、電信、汽船の都合宜しく官軍は十分に文明の利器を應用するを得たるが故なりとぞ。

西南亂(四)　希典銃創を負ひ、久留米病院に入院の事

是までの戰は殆ど第十四聯隊獨立の運動と謂ふべきなりしが、是より後は官軍の本營より派遣したる大兵も九州に到着したれば希典も其指揮の下に從ふことゝなりたり、さても前文にも記せし如く陸軍少將野津鎭雄は第一旅團を率ゐ、陸軍少將三好重臣は第二旅團を率ゐ、希典木葉敗軍の翌日、即ち二月二十四日を以て久留米に會したり。此日希典の副官中尉渡邊章久留米に至り木葉の敗を告げ薩軍來襲の勢あることを報ず。野津、三好等思ひけるは薩軍、或は熊本城を其儘にして長驅北上の策を取るやも知るべからず、しからんには彼必ず先づ高瀬を取るべき歟。彼所を敵に取られ高きに依りて戰はれては迷惑なり、此上は急に高瀬を衝きて機先を制するに如かずとて兵を進めしが薩軍も此時北上し來りしを以て、明れば二月二十五日高瀬に於て兩軍會戰す。希典此時第十四聯隊を率ゐて官軍の前衞となり戰鬪に參加す。同二十六日午前五時希典、石貫を發し迫馬川を越え

左に向つて進む。時に薩軍の一隊白石山の高地を占め、民家の茅屋に隱れて發砲す。敵は高きに居り地物に據りて戰ひ、我は平地より進みしを以て頗ぶる苦戰に陷りしかば希典は馬を捨てゝ自ら左翼の戰線に入り、しきりに士卒を勵まし、猶も奮闘を續け辛うじて山端の凸角を占領するを得たりしも、敵は薩摩隼人の習なれば屢ば逆襲を試みて希典を惱まし、正午頃まで奮闘を續け、勝敗未だ決せざりし折しも、後方より近衞聯隊の一部隊、來りて希典の兵に加はらんとす。希典此有様を見て「やあ、今になりて他隊の援を受けたらんには、勝つと雖も我第十四聯隊の功にはあらず。奮戰せよ、人々」と且罵り、且はげませしかば、全軍の氣大に振ひて、わき目もふらず、進擊したりしかば、さしもの薩軍も此に始めて敗北の色を現はしたり。希典此機をはづさず、益す銳氣を鼓して戰ひしかば、薩軍遠く植木に退却し、希典は追擊して木葉まで進みたり。やがて午後三時になりぬ。時に高瀨に本陣を据ゑし第二旅團三好少將より傳騎來りて、命を希典に傳へ速に退却せよとあり。されど希典は幸にして此要地を得たり、之を捨て去りて再び優勢なる敵の占領する所とならば、その回復は難事なり、されば此所を守りて明日總進擊の前鋒となり、直ちに田原坂を占領し、高きに據りて戰ふに如かず、田原坂既に我手に入れば以て賊の膽を破るべく、熊本城の聯絡に容易なるべしと思ひければ、御命令には候へども、願はくば我第十四聯隊、獨立して明朝まで此に宿陣し、明朝、進擊の先鋒を勤めたし、此段御許を乞ひ候とて傳騎を返し、陣地の防備を嚴にして明日を待ちけるに傳騎再び來りて退陣を促し、少將の書簡さへ齎らしたり。書中には糧食の辨じ難きこと、明日の戰略の事など述べて一先づ枉げて陣地を棄去れよとあり。希典此上は强て我意を張るべきに非ずとて、一先づ石貫に退陣したり。木葉の要地は再び敵の手に落ちけり。此時若し希典の說の如く、戰勝の勢に乘じ大軍殺到して田原坂を取りたらば、後に至りて官軍の苦戰もあるまじかりしに、其建策を用ゐられざりしは惜むべきことなりと云ふ人もありき。同二十七日薩軍攻勢を取りて進み來り高瀨の激戰となる。此日は西南戰史中の一時期を劃すべき大戰とも云ふべきものにて薩軍は三道より其精銳を盡

くして攻來り、此一擧に大局の勝敗を定めんとしたり。されば其戰鬪も猛烈にして午前九時に開戰し、日暮るまで勝敗未だ決せず、三好少將は負傷し、希典も玉名村に於て左足を敵丸に打たれたり。希典の劍、彈丸を蒙りて碎け散しに自若として一歩も退かず、敵兵三人と組打して河中に飛び入り僅に一死を免れしと云ふは此時の事とぞ聞えける。斯樣に夕方まで官軍頗る苦戰したりしかども、野津少將、急を聞きて南關より馳せ來りて正面の官軍に應援せしかば薩軍遂に敗れ、隆盛の弟と聞えし西鄕小兵衞の戰死を見るに至れり。是より薩軍の戰略一變し、攻勢を取らず。田原、吉次の險に據り、專ら官軍の進擊を防ぎ、其間に早く熊本城を陷れんとぞ計りける。希典は此日の負傷頗る重かりしかば三月一日久留米病院に入りたり。久留米病院は希典が負傷したる翌日、則ち二月二十八日を以て開きたるものなれば希典は病院店開き早々の御客樣なりき。

西南亂（五）　希典久留米病院脫走の事

希典は三月一日より同十四日まで二週間藥餌に親みたり。されど病院に在りながら戰場の模樣を聞きては、何時まで斯くてあらんことは口惜き事なりと身を悶へたることならんと思はる。希典入院の翌日熊本城の伍長谷村計介、辛うじて敵中を馳せ第一旅團に達しければ官軍諸將始めて熊本城中の消息を知るを得たり。計介の事が病床に橫はりし希典に聞えしや否やは詳ならざれども、若し聞へたらば希典もその人に依りて日夕念頭をはなれざりし城中僚友の辛苦をも聞かんと願ひしなるべし。計介の事は小學校の敎科書にも記しあれば此には述べず。但し希典も計介の人物を信じて嘗て重要の任務を命じたることありしは或人には初耳なるべし。そは去年熊本に神風連の騷動ありし時の事なり。折しも熊本鎭臺の參謀たりし大尉大迫尙敏は官用ありて小倉滯在中なりしが熊本に事起りぬと聞きて直ちに歸らんとせしとき希典はかゝる際には殊に心利きたる膽勇の士なればとて其頃小倉の營所に在りて伍長たりし計介を同行せしめたり。斯くて計介は大迫大尉を無事に熊本城に送りたる後、熊本表の狀況を營所に還り報せんとしたるにた

ま〳〵山口、秋月の亂起りしかば鎭臺にては計介に柳川士族の動靜を探り、若し異狀あらば速に還り報せよ、異狀なくば其趣を鎭臺に報じ、汝は小倉に還るべしと命じける。計介命を受けて人力車夫に變裝し柳川を偵察したれども何事もなかりければ其儘小倉に歸りしとぞ。斯樣に自身に關係ある人物なれば希典も病中にて計介の事を聞きたらば會ひたく思ひしことなるべし。さても希典が久留米病院にて療治に日を送りし間には西南戰史中に於て前後比類なき大戰と聞えし田原坂、吉次方面の戰鬪あり、薩軍無慮一萬の精鋭を集め、高きに據りて低きに臨み、逸に居て勞を待ち、二旅團に滿たざる官軍を惱まし、官軍は仰攻の不便を忍び、剩へ陣形敵前に暴露したる弱點ありしかば、心は矢竹にはやれども、容易に此天險を拔く能はず、空しく一勝一敗に日を過ごしたり。此天險が拔けざる限り熊本城との連絡も通じ難く、もし其間に城兵城を持ち切れずして、陷落の不幸を見ることあらば戰場の形勢も、人心の向背も面白からぬものとなりなんとて官軍に於ては些かあせり過ぎたる氣味ありしかば死傷の數も多かりき。希典今年二十九歲、血氣正に盛なり、身は病床に横はれども此樣子を聞きては何時まで安閑として療治を受け居らるべき。三月十四日、今は創も大抵は平癒したり、いざ再び戰場に赴かんとて醫員に斷はらず、病院を脫け出で其儘戰地に赴きたり。されば其頃希典を渾名して脫走將校と云ひしものもありとかや。希典久留米病院退院の日は則ち名高き拔刀隊が始めて田原坂に於て側面より賊陣に斫込み、其勇名を世上に轟かしたる時なりける。『兩陣の輸贏、猶は未だ分たず。千砲萬銃日に紛々たり。刀光一隊勢電の如し。擊破す田原坂上の雲』と谷將軍の歌ひし如く斯樣に元龜天正の戰記を見るやうなる變則の白兵戰をさへ行ひて敵陣を强襲したることを思へば官軍があせりにあせり、はやりにはやりて此難關を突破せんとしたると思ふべし。斯くて三月十八日となりぬ。此日野津（第一旅團司令長官）、（大山巖、三好重臣負傷につき臨時第二旅團司令長官たり）兩少將、幕僚を本陣に會し、軍議の上、我軍此處に敵と相持すること既に十有六日に及べり、激戰殆ど間斷なく將士死力を盡すと雖も未だ以て敵兵を驅逐し熊本城の圍を解く能はず、

斯くて空しく日を渡らば遂に落城に及ぶべき歟、今は萬死を賭して戰ふの外なしとの評定一決し、最高度の强襲を爲さんには先づ將士の疲勞を休め新鋭の元氣を養ひ而る後に進擊するに如くはなしとて同十九日は一同休養す。此夜雨あり、翌二十日の曉に及ぶ。かくて天猶ほ暗き三月二十日の午前五時細雨霏々として降りける間に、一軍陣地を發し二俣方面より谷を涉り、橫さまに坂路を過り、潛行して敵壘の上に攀ぢ、午前六時、號砲三發の轟くと共に不意に敵陣に切入りしかば薩軍大に驚き、是より全軍潰亂し久しく拔けざりし田原坂の天險も此所に始めて陷落を見るに至れり。是に於て官軍は勢に乘じ北ぐるを追うて直ちに植木を取り、向坂に於て再び激戰したり。されば先づ田原坂の敵壘を驚かし、遂に之を陷れたるは二俣方面より進みたる官軍にして、固より勇士猛卒多かりし中にも希典はその最も勇戰したるものゝ一人なりき。彼れ創痍未だ全く癒へざりし身を以て此大冒險の戰鬪に加はり、難攻不落の敵壘に突貫し諸將士と共に官軍二旬の鬱懷を散ずるを得たり。かくてぞ希典が命知らずの勇士たる評判は官軍の陣中に於て愈よ高かりき。此戰ありし翌日希典は當分第一旅團參謀兼勤を命ぜられ陸軍少將野津鎭雄の幕僚とはなつてけり。

西南亂(六)　希典熊本城入城の事。熊本鎭臺參謀となること。

官軍既に田原坂を取りしと聞えしかば山鹿の薩軍は自ら守ること能はず、其翌日即ち三月二十一日に官軍の爲めに其陣地を奪はれたり。是に於て官軍は三月二十三日征討總督の本營を久留米より高瀨に移して漸く南下の勢を示したりしが、薩軍は猶ほ植木、吉次嶺等の險要を扼し、此所を專途と防禦に盡力せしが、四月一日官軍遂に吉次の險を拔きしより薩軍の勢甚だ振はず、剩へ參軍黑田中將(淸隆)の引率したる別働諸旅團は海運を利用して肥後の南部に入り既に八代を取り、宇土に迫り正面の官軍と南北相應じて薩軍を夾攻すべき形を取りたれば薩軍の心

もしどろになり、四月十五日策を決して熊本城の圍を解き西郷は其本營を人吉の山中に移し、戰爭は此に一段落を告げたり。希典は三月二十日より四月九日まで植木、木留、邊田野等に轉戰したりしが、其日邊田野村の戰に於て一彈飛び來りて左腕を貫通したり。此日希典は第二旅團の少佐稻村貞務と共に官軍の右翼を指揮したりしに味方の中に敵の詭計に誘はれて妄進し伏兵に逢ひしものあり爲め、諸隊大に亂れ遂に負傷するに至りしなり。同十日此負傷の爲に希典は此度は高瀨病院に入院したり。既にして熊本開城の報を得しより創痍未だ癒えざりしかども一旦退院し、四月十八日を以て熊本城に入城す。希典が別役少佐より薩軍が花岡山に聯隊旗を樹てゝ城中を嘲弄したることを聞きていと恥かしきことに思ひしは此時の事なりとぞ。熊本城は二月二十一日賊軍の圍を受けしより足掛三ヶ月の日を數ふれば五十日程の間援軍至らず兵糧、彈藥殆んど盡き、後卷の官軍既に近づき、砲聲時として遠雷の如く聞ゆれども、諺に遠水近火を救ふ能はずとやらんと云ふ樣なることにて、城中今は轍鮒の急を感じければ、兵を分ちて攻擊軍突圍軍との二となし、如何にもして城外の援兵に合せんと計りたり。此突圍軍の中にて先づ成功したるは、少佐奧保鞏の率ゐたる部兵一大隊にして、四月八日敵中を馳突して宇土に達し、始めて黑田參軍部下の別働旅團に合し、城中積日の勞苦を語ることを得たり。黑田は奧の報告に依りて、初めて薩軍の狀況を審かにしたりければ、それより兵を左右翼に分ち、二方面より進んで薩軍の背後を攻擊し、四月十四日左翼の軍、曉に乘じて川尻の薩軍を潰走せしめ中佐山川浩一中隊を率ゐ長驅して先づ熊本城に入りしかば城南の一路始て通じ、翌日黑田參軍別働諸旅團を率ゐて正々堂々として入城したり、木留、植木等の薩軍も此勢を見て各陣地を棄て去りしかば高瀨口の官軍も進みて入城し、同十六日には山縣參軍、諸將校を率ゐて此に會したるより、城中の勇士も萬死の間に一生を得たる喜に堪へざりき。希典は僚友に會して此に勇ましき物語を聞くにつけても聯隊旗を賊に奪はれし恥辱の感情は愈よ強く、吾唯だ潔く死なんのみと云ふ心のみ切なりける。やがて四月二十二日になりぬ。此日希典は陸軍中佐に任じ、第十

四聯隊長、小倉營所司令官心得、出征第一旅團參謀の本職並に兼任を免せられ、熊本鎭臺參謀に專任したり。按ずるに希典が斯く攻城野戰の任より帷幕に坐すべき參謀の職に移りたるは一には希典既に二回の創痍を受けて未だ全く癒えず、戰場に馳驅するに堪へざりしこともありしに依ると見えたり。そは此後も希典が療治の爲め熊本以外の地に靜養したりしことあるにて知らるゝなり。されど他の重なる理由は希典、聯隊旗を失ひし初より、しきりに死地を求め、わざ／＼危險を冐すの風ありしかば此後猶ほ實戰の場に出さば、彼必ず死なん、可惜勇士を犬死さすべきに非ず、しばらく參謀部に置きて彼が思詰めたる心の和らぐを待つべしと云ふ先輩同僚の注意より出でしものと思はる。かゝりしかば希典は心ならずも日々城中に勤務して砲煙彈雨に遠ざかり、兵士の差引、將校の任命、新兵徴集、總督府との交涉、帳簿の整理など云ふ事務に其日を暮らしたり。其頃熊本城は官軍策戰の中心とも云ふべき場所となりたれば參謀たる希典も中々多事なりしことならん。然るに薩軍は熊本城の圍を解くと共に西鄕隆盛退きて人吉に據り此に官

軍と抗戰すること、月餘、猶ほ進出の機を窺ひしが五月に至りて其一隊、急に豐後に入り重岡、竹田を取る。肥後國阿蘇郡馬見原に在陣せし熊本鎭臺の兵、轉じて之と戰ひ、尋で鎭臺より派遣せし援兵も亦至り五月二十九日竹田を回復す。同六月一日薩軍人吉を守る能はずして隆盛、日向の宮崎に移る。豐後口の薩軍は敗兵を三重市に集め勢、復た振ひ此日臼杵城を拔く。同十日熊本鎭臺兵警視隊と合して臼杵を復す。薩軍重岡、佐伯に走る。鎭臺兵警視兵追擊して重岡、三國峠、旗返、陸地峠等の險に戰ふ。薩軍克たずして日向に走る。是に於て豐後方面は一たび敵なきに至りしも間もなく同二十四日、二十五日薩軍再び官軍の守線たる赤地、陸地峠に襲來し、中隊長小葉竹大尉、板垣中尉等の死傷あり、官軍一時守地を退却したれども辛うじて之を回復し薩軍遂に志を得ること能はざりき。但し此時鹿兒島は既に官軍の占むる所となり、薩軍は已むを得ず日向地方に退縮し、手も足も出すと能はざる仕儀となつたれば、此上は精鋭の卒を擧げ一擧して死生を決するの策に出でざれば復た其存在を保つこと能はざるべき勢となりしのみな

らず、薩軍の脱出には豐後地方は最も便宜の所の如く思はれしかば山縣參軍は之を憂ひ、熊本鎭臺司令長官谷干城の出陣を促しければ谷將軍は七月一日熊本を發し、七月五日重岡に出張、大分口の總指揮を掌ることゝはなつてけり。此時も希典は熊本城に在りて簿書堆裏に沒頭し、空しく同僚の戰場に戰ふさまを想像して頻りに羨望の念ありしのみ。かゝりしかば七月十一日希典は熊本より書を戰地の谷將軍に發し希典不肖には候得共、近日傷所も全癒し、山野の奔走も相試みたるに、動作も十分なれば今一たび戰場に出で、盡力致したしと云ひき。是は當時戰地に戰ひし同僚陸軍少佐兒玉源太郎負傷の事ありたればそれに代りて出陣の事を望みしなり。谷將軍も希典の情を憫れむべしと思ひければ今は希典を實戰に臨ましむるも宜しかるべきや内々其樣子を申越さるべしと、時の鎭臺參謀總長中佐樺山資紀の意見を求めたるに中佐は乃木、兒玉交代の儀、御申越の趣承知せり。卽今にては乃木を戰鬪線に出したりとて過日の如き過激の擧動はあるまじく存ず、其上尊公御在營の上は其邊の事は毫も懸念なけれども、小生の負傷も未だ癒えず、兒玉の創も輕からざれば鎭臺參謀の劇務には間に合ぬこともあるべし、されば今暫く乃木出陣の事を猶豫せられたならば當方の都合も宜しかるべく存ずと答へたり。斯くて希典は猶ほ事實上諸友僚の爲に抑留せられしが八月の初に至りて始て志の如く出陣することを得、其十七日可愛嶽の戰鬪に參加したりしが其翌日には此戰記に名高き可愛嶽薩兵突出の事ありき。斯くて希典は其二十二日に熊本に歸城し、再び參謀の任に當り、九月二十四日西郷、桐野、村田等が城山の露と消ゆるまで復た實戰に臨まざりき。

希典陣中之作

指揮刀閃曉雲破。競進兵如狂浪翻。
立馬判功山上見。先鋒已入杏花村。

（一三）希典、湯地氏を娶ること。豐橋旅團長を辭したること。獨逸に遊學すること。

大君の爲に　死なんと　誓ひてし
乃木希典は　運強く、　年若くして
功を成し　名は鄕黨に　かくれなし、
花柳の巷に　遊びても　青年士官の
勇ましと　歌姬にさへ　思はれぬ。
名家の子をば　妻にして　遊學の爲めに
洋行す。　人の羨む　身の上も
誘惑多き　境界も　彼は惑はず
さそはれず、　にごりにそまず　世に狎れず
自らなる　眞心は　雲を破りて
滿月の　かゞやき出でし　如くにて
修養の功　積みければ　武士の模範と
なりにける。

青年士官たりし時代の希典の行儀の事

希典は父の嚴重なる庭訓に從ひ武士の道を磨きたれども、青年にして官途に出仕し、天下の才子と交りたれば其始は行儀も其世の風俗に連れ小廉曲謹は丈夫の爲すを潔しとせざるなり、酒飮むべし、兵用ふべし、酒飮まざれば英雄の士に非ずなど云ひて同僚の付合には花柳の巷に遊ぶことさへも辭せざりしと云ふ。さりとてはあの嚴重なる將軍がと訝り思ふ人もあるべけれども其時代の軍人の行儀を知りたらん人はさることもありぬべしと首肯すべき歟。

希典、湯地氏を娶ること

希典は明治十一年一月二十六日熊本鎭臺參謀を免ぜられ步兵第一聯隊長に補し、同月三十日去年の戰功に依り勳四等に叙し年金百八十圓を下賜せらるゝこととなりたり。此春のことなり。希典は第一聯隊長となりたれば東京に移住し芝櫻川町

に住みけるが聯隊副官伊瀨地好成の媒介にて鹿兒島縣士族湯地定之の四女靜子を娶りたり。希典三十歲、靜子二十歲の時とぞ聞えける。靜子始は七子と云へり、定之の生みたる子女の中にて七番目の誕生なりければなり。定之は鹿兒島の漢法醫にて漢學も出來たる人なり、殊に其內室は賢夫人の聞ありしかば子女の敎育に意を用ひ靜子にも讀書習字は申すまでもなし、同縣の士菊池某に就きて書までも學ばせたり。靜子鹿兒島の新屋敷に生まれ明治六年の春十五歲の妙齡を以て父母に從て東京に移住し、赤坂榎町に住み、五年の後希典の妻とはなりけるなり。靜子を知れる人の話に鹿兒島にては少年子弟の敎訓には昔ゟ土地に自から一種の風俗ありて其人物を鍛鍊すべき道も備はり居たれども女子の文字讀むは要ぬことなり、女の身にて男の樣なる學問するものは厭ふべく、惡むべしとて、女子には書物など敎ふるものもなかりしを、靜子の兄なる人、父に勸めて時勢既に變じて候へば、此後は女子と雖も書讀までは當世に齡しがたきに至らんも知るべからず、あはれお七なども書讀ませ候はゞやと云ひければさらばとて師を撰びて通學さすることゝはなりけり。然るに靜子の才かしこく學問も思の外上達したりし故に師なりし人も其利發なるを感じ、同門の少女たちもお七さんには及び難しとて內々嫉ましく思ふものもありしと云へり。扨此二人の結婚こそ誠に乃木式とも云ふべきものなりける。たとへば希典或時伊瀨地と共に晝飯を喫しける折、伊瀨地に向ひ、母が頻りに家內を貰へと勸むる故、一時遁れの口上に山口縣の女は御免なり、鹿兒島の女なら貰ふべしと言ひ置きたるに、近頃母は御身の所望の通り、鹿兒島縣人の娘を見出したり、誠に良緣なりと思へば是非貰へと云ふなり。さりながら我心に染まぬ女は貰ひたくもなし。足下若し希典の妻として宜しかるべしと思ふものゝ心當りあらば世話せられよと云ふ。伊瀨地は兼て靜子の事を知り居りしかば其家庭、生立ちの事など物語りしに希典は結構なり、直ぐ貰ひ吳れよと云ふ。それは餘りに性急なり、兎も角も一度本人を見たる後に決せらるべき歟と云ふ。やあ左樣の配慮には及ばぬことなり、僕たとへ本人を見ずとも家內として我家に迎へたる上は斷じて後日に至り諸君に御迷惑を懸くること

なかるべし、是非貰ひてくれたまへと云ふ。伊瀬地も然らばとて自身の新宅祝に靜子も手傳として來るべければ其時見合をせられよとて分れたり。やがて其日となりぬ。希典の長官中將野津鎭雄、其弟同道貫、西、大島などの武官を始め凡そ五十人程、伊瀬地邸に集れり。希典も勿論此祝宴に列し、此處にて始て靜子を見たり。斯くて野津中將表向の媒妁人となりめでたく合卺の式を擧げたりとぞ。此見合の折は人々希典を揶揄しければ希典も面を紅に染めけり。湯地氏と野津氏とは通家の親あれば中將も乃木の妻は湯地の娘に限るとて喜んで媒妁の勞を取りしとも云へり。此頃の希典は磊落の軍人なりければ婚姻の夜も新婦は既に來りたれども、新郎は未だ隊よりかへらず。やがて歸りきたると共に賀客を相手に酒を飮み始め新婦に向ひては一言も發せず、はては其儘醉倒れて明朝まで熟睡したりしとぞ。

希典、獨逸に遊學の事

希典は先輩の引立もあり、職務にも忠實なりしかば追々官等も進み、明治十三年四月二十八日には陸軍歩兵大佐に任じ、同十六年二月五日には東京鎭臺參謀長に補し、同十八年五月二十一日には陸軍少將に任じ、第十一旅團長に補せられたり、時に年三十七なりき。同十九年十一月三十日御用を以て歐洲に派遣を命ぜられ、獨逸に遊學し、在學一年半に及び同二十一年六月を以て歸朝したり。日本の陸軍は其始め獨逸を模範とせしに非ず。幕府の末より海軍は英國、陸軍は佛國に倣ふべしとの事にて幕末の慶應二年には佛國士官シャノアスを聘して敎官とし、明治政府になりても明治五年に佛國士官マルグリーを聘し、專ら佛國式を學びたり。されば希典なども佛國流の西洋兵式に育てられし青年士官なりける。然るに其後獨逸の兵學に注意し明治十八年モルトケ將軍の高弟と聞えたりしメッケルを聘したりしより、日本の軍學は此に一變したり。されば此頃より、日本の兵制は始めて組織的の大軍を運用すべき準備も成り、戰場に於ける軍隊の指揮運用、竝に宣戰と同時に豫後備軍を編成する法、戰時に於て土地と人民とより資源を得、

き途に就きて新しき觀念を得るに至れり。希典の獨逸遊學も此時代には相應の事にて日本の陸軍が新面目を現はし來るべき一原因となりにける。希典は獨逸遊學中、言語の通ぜざるにも拘はらず、善く獨逸軍人の生活を觀察し獨逸國の偉大なる所以はその軍人の節制を守り、規律に服し軍人たる面目を重んずること生命よりも甚しきに在りとし、歸朝の後は行儀も昔の磊落なるに似ず、專ら古武士の風骨を學ぶやうになりしかば人々其豹變に驚きけり。

希典、豐橋旅團長たりしとき辭職の事

斯くて希典は始めて歐洲の文明を觀察し、其節制の兵を見たりしが同二十二年三月九日には近衞步兵第二旅團長に補せられ、同二十三年には步兵第五旅團長に補せられて豐橋に赴任したり。然るに間もなく桂太郎名古屋師團長として希典の上官となりき。桂太郎は其始め希典よりは下級の將校なり明治十七年陸軍大變革の時より桂、川上兩大佐の名は軍人社會に注目せらるゝこととなり、先輩の信用も厚かりしかばめき〳〵と出世し今は希典の上役となりぬ。諺に云ふ迹の雁が先になりしものなり。されば希典を善く知れる人は希典常に獨逸軍人の氣慨を賞し、獨逸の軍人は故なくして其後輩に班を越さるゝ時は自己の面目を損せらるるものとし辭職するを常とす。是や誠に恥を知る丈夫の行と謂つべきものにて御國の軍人は猶更かくこそあらまほしけれなど言ひ居れば彼も後輩桂の下には尻こそばゆく思ふべしなど云ひけり。希典の此頃に於ける風采を想像し得べき一話あり。明治二十四年遠江國濱松に出張し、同國氣賀の方に赴かんとしたるに、郡長代理として郡書記某と云ふもの來り、氣賀にはよい御宿も候はねば同地の氣賀半十郎方に御泊りありたし、氣賀は富みたるものに候へば粗末の御待遇も致さゞるべしなど云ひしに希典は大喝一聲して乃木は未だ左樣なる馬鹿者にはなりませぬと云ひしとぞ。是は缺乏に堪へ、困苦を忍び、大寒酷暑を厭はず、風雨雪霜の間にも露營の夢を結ぶべきが軍人の常なるべきに、國の大宮なりとて田舍人などの款待するを善い氣になりて宿舍の粗末なることなどを厭ふものある

は惡むべきこととなりと思ひければ、かくは小吏に一驚を與へしことならん。それより希典は遽に或る寺院に宿することゝ定めしに、其寺の坊主も俗物にて、法衣など立派に着かざり、追從、輕薄の辯を弄しければ希典此處にも堪えず、其儘立あがり、寺の門前に在りし田舍旅籠屋の二階に上りたり。亭主は此珍客の闖入に遇ひて膽をつぶし、楢の葉を折りて花瓶に挿しなどし唯だ謹んで居たりけり。希典亭主の飾りなき朴吶のさまを見て、始て破顏一笑し、副官に向ひ此處の亭主は感心の男なりと云ふ。希典其夜は副官と共に此茅屋に快く一泊し、翌朝出立の時、副官に命じ主人に茶代を取らせよと云ふ。副官金五圓を出して與へんとせしに希典は「馬鹿、おれが出す」と云ひ自ら二十金を投じて去りしかば逆旅の主人も其茶代の多きに迷惑したりと云ふ。我が奢らざるは錢を愛むが爲に非ず、軍人の義務として溫飽を願ふべからざるを以てなりとは希典の志なりしなるべき歟。かくて希典は明治二十五年二月三日を以て休職となり、暫らく閑地に就きたれば、希典の朋友はさてこそ彼は獨逸軍人の氣慨を學び後輩の下に就くを屑しとせざりしなるべしなど噂しけるものもありき。されど希典は其年十二月八日を以て歩兵第一旅團長となりければ左樣の噂も自ら立消の樣になつてけり。

(一四) 日清戰役、希典滿洲に出征の事

日月梭の　如くにて　城山の秋
露深く　人は弔ふ　古戰場、
征韓論に　血はわきて　腕を鳴らせし
壯士の　骨朽ちてより　十餘年、
高麗半島の　風吼えて　黃海に立つ
波荒く　勇士再び　矛を取り
日本の史に　例なき　世の大戰と
なりしとき、　黃沙天を捲く　滿洲の
花園河口に　上陸し、　遼東の野に

戰ひて
とり分け言へば
いちじるく
軍人ありき。
誰なりと。
三十路に足らぬ
其人ぞ
乃木希典も
置きそめて

武功多かる
蓋平に
世に猛將と
其人は
植木木の葉の
壯士ぞと
人は紅顏
此頃は
はや初老とぞ

其中に
勇戰の名の
言はれたる
問ふこと勿れ
戰に
世に歌はれし
老い易く
頭に霜の
なりにける

日清戰役（一）希典、滿洲に出陣の事

光陰矢の如く植木、木葉の戰には二十九歳の青年なりし希典も既に四十六歳の初老となりぬ。明治二十七年三月二十七日朝鮮の志士金玉均上海に殺され、尋で東學黨なるもの朝鮮の全羅道に起り、「夷倭を逐滅し、聖道を澄清す」てふ名を以て兵を擧げ、朝鮮政府の派遣したる招討使之を討ちて大敗したりしを機とし、清國は我國との間に締結したる天津條約に背きて豫じめ我國に通知せず、大兵を出したりしより事起り、六月五日第五師團（廣島）に出師の命下り、七月二十三日大鳥公使、兵を率ゐて朝鮮京城に入り、同二十五日豐島沖の海戰ありて日清兩國始めて兵火を交へ、同二十九日牙山、成歡の戰あり、八月一日宣戰の大詔を發せられ、同二十六日、日韓兩國攻守同盟を結び、九月十五日　大元帥陛下廣島の大本營に御着あり、此日我軍平壤を陷れ、翌日黄海の海戰ありて海上權を我手に收め、第一軍司令官陸軍大將山縣有朋は廣島名古屋兩師團の兵を統率して既に朝鮮の地に在り、日本の軍威大に揚がれり。希典の所屬長官たりし第一師團長陸軍中將山地元治を始め第一師團の勇將猛卒は戰端の開けし始より、頻りに第一軍の勇戰を羨み、清國も流石に大國なれば、清兵を朝鮮半島より驅逐し黄海の海權を我海軍のものにするまでには必ず半年はかゝるべき歟。さ

れば我等が第二軍に編入せられ直ちに滿洲を衝かんはいづれ明年の春なるべし。それにては餘り遲きことなりとて、いさゝか退屈の色なきにしも非りき。希典此時詩を賦して曰く。

肥馬大刀尙未酬。　皇恩空浴幾春秋。
一瓢傾盡醉餘夢。　踏破支那四百洲。

〇

聞說滿洲山水奇。　鐵蹄欲踏上春時。
征途若過梅花地。　折得贈君一兩枝。

梅花の開く時節ならでは、鐵蹄を以て滿洲の野を蹂躪し皇恩に酬い難し、唯今は酒でも飮んで四百餘洲を荒廻はる夢にても見るだけなりとて徒らに髀肉の肥ゆるを歎じたる悶々の狀想ふべし。然るに世界の諸國が眠れる獅子なりと思ひし淸國は其實張子の虎なりしかば、日本軍の向ふ所、戰つて勝たざることなく、豫期以上の成功を博したれば、第二軍の出征も其期を早め、其年九月下旬には第一師團も出征することゝなれり。師團長山地は名高き猛將なれば出師の命を受くると共に家族を土佐の鄕里に歸し、愛馬を宮內省に獻じ、以て骸を馬革に裹むの決心を表し、部下の將校を芝紅葉館に會して暗に永訣の意を表し、九月二十四日を以て東京を出發したり。越えて二日、九月二十六日を以て陸軍大將大山巖第二軍司令官に補せらるゝ旨公表あり、十月十六日に至りて大山、山地、希典以下長門丸、橫濱丸、名古屋丸に分乘し宇品を出帆す。大山大將は出發の際大元帥陛下より御劍を賜はりしと云ふ。秋高くして馬肥えたり。一軍の踴躍して前途の功名を期したること想ふべきなり。時は旣に黃海戰の後にて海上復た危險の虞なかりしかば掩護の艦隊を要せず第二軍は 諺 に云ふ裸の道中にて大手を振つて敵海を橫行したりけり。

日淸戰役（二）希典强敵に逢はざりしこと。幷に大連灣容易に日軍の手に歸したること。

斯くて第二軍は舳艫相啣んで宇品を發し十月十九日の夕景には朝鮮大同江の江口に達し、それより海軍偵察艦の報告に基き同二十四日盛京省の東南岸に在る一小灣華園河口に上陸し、同六日を以て全軍の上陸を終りたり。此地は金州を去る二十一里、旅順を去る三十五里の處にて、旅順を東京とすれば小田原位の位置に當る。旅順、大連を陷れて其海軍の根據地を覆へし清國の喉首を押へつくべき任務を有する第二軍が斯樣に敵に接近したる所に上陸を試みたるは我兵氣既に清國を吞み、眼中全く敵なしと云ふも可なり。全體斯樣の敵前上陸と云ふは軍備優勝の國が劣等國に對して行ふを原則とするものにて敵を相當に尊敬したらば斯樣の事はなるまじきなり。此時希典は第一旅團を率ゐて全軍の先鋒たりしかば、早く華園河口に達したるに落莫無人の地なり、敵は我が豫期したる通り隻影を見せざりしかば直ちに工兵に命じて棧橋を掛けさせ、それより人馬共に上陸し、何の苦もなく先づ馬を滿洲の野に立つることを得たり。此處より七里にして貔子窩あり、九連城より旅順に行くべき街路に當れり。希典等軍容整々と

して之に向ひしに此にも敵影なし。さらば直ちに金州に向へとて十一月三日我大君の萬歲を歌ふ天長節に山地師團長以下貔子窩を發す。希典は前衞の任を受け先陣を勤めたり。同五日希典先づ劉家店に達し前面の破頭山と云ふに敵ありと知りしかば、午前十一時士卒に晝飯を喫せしめ、直ちに敵壘の下に進み戰ふ。敵は天險に據り、高壘より俯擊し、我は低面より仰射す。地の利を敵に占められたれば戰鬪も思の外に長引きたり。されば希典は戰鬪四時間の後午後二時に一旦休戰し、午後四時に再び戰鬪を開始したれども敵猶ほ屈せざりしかば午後八時に至りて再び休戰し陣地を換へて、明日を待つことゝしたり。此夜敵壘より發する砲聲轟々として絕へざりしも希典常の如く談笑し、はては露營の夢穩かに鼾聲雷の如くなりしかば兼ねて其勇名を聞き居りし兵士等も其大膽を感じたりしとぞ。同十六日午前六時希典を始め第一師團の諸隊再び破頭山を攻擊せしが、昨日の手並に懲りたる清兵は忽ちの中に敗走したり。さらば直ぐに金州を攻めよとて山地師團長の本隊は福州街道より希典の隊並に他の一支隊は金州街道より共に金州城に迫

り希典の一隊先づ敵壘に乘込みしに元より臆病神のつきたる清兵の事とて是も直樣敗走し旭日の國旗早くも城頭に飜へれり。山地中將は勇猛比類なき武將なりしかば此圖をはづさず、敵に息をつがすなとて其日直ちに大連灣砲臺攻擊の部署を定め希典は和尙島の砲臺を攻擊すべき任務を受けたり。抑も大連灣砲臺は獨逸人ハンネンケンの設計したるものにて西洋兵學の智識によりて科學的に建築したるものなれば、壘壁も堅固に出來居り、クルップ砲大小四門を備ふ、いづれも自動回轉砲なり。若し一中隊の勇兵あらば攻擊軍の一師團を此に支ふることを得べし。然るに思ひきや清兵は金州落城と聞いて早くも腰を拔かし、大砲には彈藥を込めたるまゝにて倉惶として遁げ去りたれば、翌日(十一月七日)拂曉希典が和尙島の砲臺に迫りし頃は臺中早くも隻影を見ざりしかば、折角今日こそは少しは齒に立つ敵もあるべしと心待ちに待ちたりし希典も暖廉に腕押しと云ふ樣なることにて、しばらくは呆然たりしと云ふ。此日我艦隊に於ては陸軍を助けて大連灣の砲臺を夾攻すべしとの兼約を守り諸艦進んで大連灣に達したるに和尙島の砲臺に黑衣黑帽の日本兵あり、日本國旗の高く揭げられしを見て、陸軍が意外の功を成したるを喜び直ちに大連灣內の掃海に着手し、大連の軍港全く我手に期したりとぞ。植木、木葉の勇將たりし希典に取りては斯樣なる樂戰は餘り法外なることにて戰爭やら演習やら分別のつかぬことなりしなるべし。

日清戰役(三)旅順陷落の事

大連灣既に我が手に入りたれば此上は直ちに進んで旅順港を攻むべき順序なり。此旅順港は誠の天險の地にて二十餘の堡壘あり、何れも泰西の新式に依り西洋人の設計にて造りたるものにて建築物全體の價値は五六億圓位なりと云ふ程の事なり。されば西洋人などは城は東洋無比の鐵壁なり、礮臺は堅固なり、兵糧、彈藥は三年を支ふべし。背面の防備だに油斷なくしたらば百年も落つることなかるべしなどゝ賞讃せり。然るに金州大連灣に於て淸人の手並を知りたる第二軍は何の遠慮もなく此天險に向て馬を乘り出したり。今其大略を語らんに第二軍の

中、山地中將の第一師團其外は十月十七日先づ金州を發して旅順に向ひしが、翌十八日土城子にて先に進みし一隊は優勢なる敵に會し中尉一人戰死、大尉一人負傷し、下士卒の死者十人負傷者三十一人に及びたり。是は餘りに敵を馬鹿にし過ぎたる勇士の過なれども、兎に角清人能く爲すことなしと侮りたる第一師團兵に取りては不意に蜂に螫されたる程の痛手なり。其上敵兵の我死者に對する處置は誠に殘忍を極めたるものにて、或は鼻を殺ぎ或は眼球を抉き、或は腹を裂き睾丸を拔きなどしてありければ之を見たる我兵士は大に怒り必ず戰友の爲に復讎せずんば已まずと思ひけり。同二日大山大將諸將參謀を李家屯の西北に集め明日より旅順總攻擊の軍議を開きしに、此日敵より戰を挑みしかば第一師團兵之に應戰す。希典も此戰爭に參加したり。明くれば十月二十一日なり。軍議の如く旅順總攻擊あり希典は椅子山砲臺の北方より毅軍練兵場の方面に突出すべき命を受け同方面に行軍中、途中にて午前八時椅子山の砲臺陷りしかば砲臺より逃れ來りし清兵一千餘人、希典の前路に向て殺到す。希典迎へて之を擊つ。饅頭山の砲臺、しきりに發砲して清兵を助けしかど希典物ともせずして奮戰したりしかば半時間許の間に清兵は遁げ散りたり。希典はそれより毅軍練兵場の敵に當りたり。此日午前八時椅子山の砲臺先づ落ちしより午前十一時には二龍山の砲臺陷り、午後五時には黃金山の砲臺陷り、流石に金城湯池を以て誇りたる東洋の名城も其二十餘砦を擧げて一日の中に我手に落ちたり。然るに復州方面の敵兵は我大軍の主力を旅順攻擊に集中し後方の守備稍や薄弱なるを覺りしかば昨日より大兵を以て金州城を圍み同地の形勢甚だ危しとの報ありしかば希典旅順陷落と共に一息ほつとつきたる間もなく兵を率ゐて金州に急行し同所の守備隊を助くべしとの命を受けたり。今日まで三日の間險を越え、三日の間、敵と戰ひ、疲勞既に極まりし時に於て此命に接す、武士の務こそ誠につらきものなりける。されど希典はいざ卿等、是より金州にて兎狩りせんとて、直ちに出兵の用意をなし、一隊の軍馬疾風の大漠を渡るが如く十里の復州街道を馳せ下り同二十四日午後一時金州に着陣したりけるに幸にも金州の守備隊は寡兵を以て大敵を擊攘し、

其日まで無事なりしかば希典は金州城門の外に於て守備隊長に會し其無事を祝したり。是より希典しばらく金州に居る。此に此頃の希典につきてさま〴〵の物語あり。第一軍の旅順を取りしときは其前に土城子の事ありしかば兵士の中には復讐の念抑へ難かりしものもあり、旅順に入りてよりは少しにても抵抗するものは直ちに殺したるもありしかば、さては日本人は血に渇したる好戰的の本能掩ひ難く、虐殺を恣にしたりなど批判する外國人もありしと聞えたり。然るに希典は始より軍規を嚴肅にし、何處までも仁義を以て敵を待つべしとの說なりしかば、我兵士の取締りも成るべくは十分行屆くやうにし不仁の名を得ざる樣にいたしたし、殊に一軍の中心たるべき高級武官に於ては毫末だも、軍規を輕んずるが如き言行あるべからずと苦言痛語したりしとぞ。又金州城陷落の時の事なるべし、諸隊の將校、師團司令部に引上げ來りしに戰利品山の如く營中に集めてあり、中に虎、熊、狐などの皮を付けたる外套あり。將校いづれも善きもの得つ、いざ借りて歸らんとて各競うて其好む所のものを取りてけり。希典にも持ちかへりたまへと云ふに、取る樣子もなし。山地中將は磊落なる人なれば「まあ、左樣言はずに記念になるもの故、持ち行きたまへと」勸めぬ。希典も上官の詞なればさらば一枚申受けんとて受取りしが自身の營所に歸る途中にて野戰病院に立寄り、患者にかけ與へられよとて病院の役人に渡し、自身は常の如く兵士と同樣の外套を着し居たりと云ふ。旅順此頃の氣候は寒暖計、氷點下八度に下り、口鬚は氷結して氷柱となり鼻水も流れながら氷り、水筒の水も氷りて飲み難き時もあり、兵站部の握飯は凍結してぼろぼろとなる程なり、左樣の寒氣にも兵士の苦勞を思ひて獨り自ら厚き外套を着るに忍びず、且分捕の品にはそれ〴〵取扱の規則ありて一旦は國家の所有たるべきものなるに一時の便宜とは云ひながら故なく借り返るは我心に恥づる所なりと思ひしなるべし。之を聞く人昔し希典の師なりける玉木文之進は、長州藩の郡奉行たりしとき百術ありと雖も一淸に如かずとて「不如一淸」の四字を刻みたる印を用ひし程の廉潔なる人なりしが、希典の廉潔は藍より出でゝ藍よりも靑く其師にも勝れりと歎賞し、又或人は希典が士

卒と艱苦を共にせんとするは漢の將軍李廣の風ありと云へり。加之希典は敵の將士に對しても軍人同志の禮儀を守り、金州を守備せし時清兵の捕虜中に中隊長相當のもの、下士相當のものなどありし由を聞き彼等を待つに尋常の兵士を以てすべからずとて各その位置相應の禮儀を以て之を遇せしかば彼等も日本軍人の雅量に感激したりと云ふ。猛きのみが武士に非ず、かゝるやさしく、しほらしき心ありたればこそ、部下の士卒、皆此人の爲に死なんとぞ思ひける。

日清戰役（四）希典蓋平城に武名を揚ぐること

希典は其後暫らく金州を守備し居りしが十二月五日に至りて普蘭店支隊司令に任じ同十一日同地に着し、翌明治二十八年正月元日を此に迎へたり。然るに是より先き敵將宋慶優勢なる大軍を以て田庄臺に在り、兵を分ちて蓋平を守り、我第一軍、（時に第一軍の桂中將は海城に在り）と第二軍の中間に介在し、數ば我を惱ませしを以て第二軍は司令部に於て議を決し第二師團をして混成旅團を作り、先づ蓋平を衝きて宋慶の左翼を絶ち第一軍の第三師團と連絡を通ぜしむべきことに定めぬ。此命令舊臘三十日を以て第一師團に下りしかば第一師團司令部に於ては更に混成旅團を作るべき部隊に命じ悉く普蘭店に會し希典の指揮の下に進撃せしめたり。是に於て希典は各部隊の集合するを待ち一月二日凛冽たる朔風を侵して普蘭店を出で、途中に於て屢ば敵の候騎を撃攘し、一月九日蓋平に達し、翌日午前五時半を以て開戰し、同九時四十分を以て之を陷れたり。蓋平の清兵は今迄の樣なる柔弱のものに非ず、自ら城外三町程の蓋平河岸に出で來り、半月形の掩堡及び復防禦の堡までも築き、是に依りて我を射撃したり。是さへ既に清兵としては異數の事なるに是までの敵の如く遠距離よりあわてゝ射撃を行ふことなく、我兵の彼の射界に入るを待ちて始めて發射し、着彈も頗る正しく、我地に伏して敵彈を避くれば敵は直ちに射撃を止め、我立てば又射撃す。加ふるに蓋平河は結氷して滑り易く、容易に渡るべからず。我左翼前の營口街道よりも敵兵陸續縱隊を作りて襲ひ來りしかば勇猛無雙の日本男兒も此に至りて些か躊躇の

色ありしに、希典は馬を陣頭に進め、今の時は唯だ進むあるを知るのみ、いざ人々よ驀地に進んで氷河を踏破し敵陣を突き破れと命令したり。其號令森嚴にして氷よりも冷かに、鐵よりも堅く、勇氣凜々として傍を拂つて見えたりける。陽氣の發する所金石も亦透る。希典の精神は一道の靈火となりて全軍の心を焚せしかば、此號令を聞くと均しく一同ワーッと喚聲を揚げ、大河の中に飛入りたり。河は一面に凍合して所々凸面の傾斜を爲す。我兵は倒れては起き、起ては倒れ、敵の狙擊を事ともせず忽ち一齊に前岸に達し敵壘に突入し、さしもに精鋭を誇る宋慶部下の淸兵をして膽落ち、氣沮ましむることを得たり。此蓋平の戰勝に依りて數ば金州を逆襲せんとしたる敵勢を挫き、海州方面の危險を除き、第一、第二軍の連絡を全うすることを得たりしかば、希典を知るものも知らざるものも其大功を賞讚し武名は愈よ高かりける。

（一五）遼東還附、希典臺灣出陣の事

春とはいへど　梅咲かず　わづかに青き
垂楊の　里もまれなる　滿洲は
砦の下に　雪積みて　我日本の
霜枯れの　寂しさに猶ほ　まさりけり。
希典此所に　在陣し　勇名高く
雲井まで　聞えてければ　此春は
中將にまで　昇進す。　大和男兒の
膽勇に　自尊の夢の　破れたる
淸國遂に　悔悟して　金を償ひ
土地を割き　此に平和の　約成りて
帝國の武威　揚りける　四月の末に
思ひきや　歐州無雙の　强兵と
武名の高き　大國は　その昔より

我物と
先づ手をつけし
ありければ
語ひ合ひて
名を假りて
我軍人が
遼東を
支那に返せと
恐れざる
心はたけし
日本刀
蒐の毛の末の
八隅知し

兼て思ひし
人ありと
他の大國を
表面には
裏面に野心を
血を染めて
再びもとの
迫りけり。
我が日本の
昔より
氷に似たる
塵ほども
我大君は

滿洲に
ねたむ心の
二つまで
東洋平和に
おしかくし
我ものとせし
主人なる
正義を履みて
武士の
傳へ來りし
其刄
錆びざりけれど
その爲に

風收まりて
かへりたる
あらしの立ちて
思召し
枉げて許させ
空しくて
領土を
憤り
されば南の
唯一つ、
僅に殘る
思ひしに
竿を掲げて

浪立たず
亞細亞の海に
人草の
かの三國の
たまひけり。
新に得たる
人に奪はれし
思ひやるだに
新領土
此戰役の
ものなれば
昔を戀ふ
やさしくも

もとの平和に
再びよ、
なやまんことを
干渉を
百戰の功
帝國の
武士の心の
あはれなり。
臺灣島は
かたみとて
いとしきものに
頑民の
彈丸黑子の

地に據りて　王師を迎へ　戰ひぬ。
此時までも　遼東を　守備してありし
希典は　大君のみこと　かしこみて
風涼かに　空清き　大連灣を
船出しつゝ　我故郷の　夏よりも
あつさはげしき　基隆に　汗をふるひて
上陸し　鎮定の功　なし終へて
其翌年の　春深き　彌生の頃に
陸奥の　青葉ヶ岡に　凱旋し
武名いよ〳〵　高かりき。

日清戰役（五）希典太平山に戰ひしより、金州方面守備隊司令官たりしこと。

希典は明治二十八年正月十日蓋平城を陷れ敵の勇將宋慶の膽を破りしより四十餘日の間は蓋平に在陣したり。此間に二月十二日、山東省の威海衞に於ては淸國水師提督丁汝昌、降を請ひて自殺し、港内の軍艦其外悉く我有に歸したり。第一師團長山地中將は此時金州に居りたるが蓋平の大敗以來營口方面に遁去りし敵兵を追擊し、遼河の咽喉たる營口を占領して北淸の關門を奪はんと思ひ、二月十三日金州城を發し、同じく十九日蓋平城に至り、此處にて希典に會し、敵狀を偵察したるに營口と蓋平の間に太平山と云ふ所あり。敵將宋慶、徐邦道、馬玉允など云ふもの兵一萬二千、砲十門を以て立籠り居る由、聞えければさらば進んで彼を討つべしとて希典も共に出陣し、同二十四日を以て遠く之を後方に走らせたり。此戰は朝より午後に亙りたる長時間の大戰にして敵も味方も粉々たる飛雪の中に雌雄を爭ひき。太平山の東南に當れる麓に太子窩と云ふ所あり。希典の率ゐたる第十五聯隊の兵、先づ此要地を約し山上山下より十二門の大砲を以て敵軍に打かゝりしかば、それより敵兵の意氣阻喪して敗北したるものなりとぞ。

雪中の戰爭なれば兵士の凍傷に罹るもの多かりき。此頃なりけん、希典も亦兩耳に凍傷を病みたれども、元氣毫も衰へず。詩を賦して友人に贈りける。其詩に曰く、

稀有柳楊無竹梅。　滿洲春色亦奇哉。
飛雲塞下尙氷雪。　何日東風渡海來。

飛雲塞は蓋平の城北に在り。さらば此詩は蓋平城にての作なるべき歟。然らんには三月中旬後のものなるべし。（希典再び蓋平に還りしこと下にあり。）滿洲の春色は僅に垂柳の村を見るのみ。梅花も咲かず、竹もなし、春來れりとは名のみにて、飛雲の塞下に氷雪猶は皚々たり、何の日か東風海を渡り來りて春らしき春を見んとは希典其頃の感懷なりしなるべし。間もなく三月四日第一軍の第三師團（師團長 桂中將）、第五師團（師團長奥中將）牛莊の敵城を拔く。是は第一軍にては平壤以來の大戰なり。同六日第一師團之と會して營口の敵を破り、同九日進んで田庄臺を圍む。此地は營口の北に在り、南の方遼河を帶び要害善き所なり。敵將宋慶、馬玉昆、劉盛林等兵六十營を以て之を守りしと云ふ。されば臆病神のつきたる淸國兵の事なれば何でう持ち堪へ得べき早朝より戰始まりて午前十時には早くも之を陷れたり。營口、田庄臺の戰に希典が第一軍の勇將として例の如く花々しく戰ひたるは勿論なれども、記事餘りにくだ〳〵しければ略しぬ。斯くて希典は其十二日を以て蓋平に還りしが、四月五日陸軍中將に任じ第二師團長に補せられたり。同十三日大總督府、本營を廣島より旅順港に進め、此上は北京城を衝くべしとて日本軍人の意氣旺盛なりしに同十七日馬關に於て媾和條約の締結ありしかば世界を驚かしたる此大戰も此に終末を告げたりける。然るに四月二十三日になりて露西亞、佛蘭西、獨逸三國公使より各其政府の訓令なりとて覺書を我政府に出し東洋平和の爲に遼東半島を永久に日本の領地とすることは見合はせられんことを希望する旨申出でたり。最近世史に名高き三國干涉と云ふは則ち是なり。日本の軍人が千辛萬苦の結果、淸國より割き得たる土地を何の故もなく還せと云ふ。若し其儘還したらば彼は是に依りて恩を淸國に賣

り。從て極東に於て前よりは好位地を占むることを得べし。斯くては諺に云ふ犬の骨折りて得たるものを鷹に奪はれしに異ならず。日本人民の憤怒は中心より湧出でゝ、此上は面白し、歐羅巴の三强國を向ふに廻はし一快戰するの外あるべからずなど、息まきしものもありけれど、かくては折角平和になりし世を再び戰國とし天下の蒼生を苦しましむるのみなり。尺蠖の屈するは伸びんが爲なり。今は彼の申す旨に任すべしとて三國へは申さゝる趣帝國も同意なり、但し此事は帝國より直ちに清國に掛合ひ申すべければ再び貴意を勞すべからずとて帝國自ら決して潔く遼東の新領土を清國に還附することゝしたり。此事を聞きたる希典などの心中察するに餘りあり。かく遼東は彼に還すこととなりたりしが、希典は其後も五月十八日に金州方面守備隊司令官を命せられ同地に滯在しける中に八月二十日軍功に依り特に華族に列し男爵を授けられたり。かくて希典は其年九月八日まで同地に滯在しけりとぞ。

日清戰役（六）　希典、臺灣出陣の事

遼東既に還附の已むを得ざるに至りし上は媾和條約の結果として我が新領土たるものは唯だ澎湖島と臺灣島のみなり。此二島は芝罘に於て媾和條約批准交換の後二ヶ月間に清國より日本に引渡すべき約束なりしかば清國は五月の末に使節を澎湖島に遣し、我政府に於て新たに臺灣總督に任じたる樺山資紀に會し引渡の公式を終へたり。然るに臺灣の士人は媾和成立の始より日本の領地となることを喜ばず、五月の末には、清國政府に向ひ「臺灣士民。義不レ臣レ倭。願爲ニ島國一。永戴ニ聖清。」と云ふ十六字の電報を發し、臺灣は自治共和の國たりと宣言し、唐景崧と云ふもの大統領（總統）となりて臺北に居り、黒旗軍の勇將劉永福と云ふもの臺南に獨立し、健氣にも王師に抗せんとしたり。帝國に於ても始より一たびは頑民を懲さねば、臺灣は我新領土たる實を全ふし難しと思ひければ、海陸の兵並び進み、先づ近衞師團の兵を以て六月の初には基隆を占領したり。是より先に大統

領唐景崧は始の大言にも似ず。早くも影を隱くして命を全ふしたりしかば臺灣共和國は三日天下とやらん云ふやうなることにて忽ち出來て、忽ち亡びたり。斯くて皇軍の向ふ所靡かざる所なかりしかば、臺灣の北部は間もなく平和に歸したれどもその南部は熱帶に近き土地なれば夏秋の間は行軍に宜しからず、殊に颱風の起り易き期節故海軍を用うるにも不便なれば暫らく其儘に致し置きたるに、敵はそれを知らず、是れは臺南の黒旗軍と其將劉永福とを恐るゝ故に容易に手を出さぬものなりと自惚れ居たり。黒旗軍は嘗て安南、臺灣にて佛國の兵を惱ましたりとの名聲あるが故に日本軍も與みし易しと思ひ居りしを以てなり。さりながら黒旗軍も評判と事實とは丸で違ひたるものにて實は民を害するには餘りあり、敵を禦ぐには足らずと云ふ程の無規律、無節制の土匪同樣のものなりしかば、何條我日本軍に敵し得べき。十月下旬王師愈よ南下し、海軍と共に南北より夾攻するに及び何の苦もなく敗北し、戰爭らしき戰爭さへなし得ず、打狗砲臺の如きは粤勇五千を以て守れる堅砦なり、日本軍艦寄せ來るともよも容易には落つまじなどゝ買被りしものもありしが、十月十四日日本艦隊に砲撃せられしときは一寸應砲の眞似事をしたるのみにて、日本兵に一人の損傷もなく、彼にも鐵砲玉の傍杖を喰ひし鄕民二人の外に兵士二人の死者ありしのみにて何の苦もなく陷落したり。此時希典は打狗を去る三英哩の處に達し居りしが餘りに敵の腑甲斐なきを見て可笑しくも、腹立たしくも感じたりしならん。却て說く、希典、此年九月八日まで金州を守備し居たりけるが第二師團を以て南部臺灣征伐の軍に參加すべき命を受け、同日金州を發し、大連より船出し、同十二日基隆に上陸し、十月十一日基隆を發して臺南に向ひ各地に轉戰し、此日打狗の陷落を聞きたるなり。斯くて希典の率ゐたる第二師團の兵はそれより猶ほ進み戰ひしが、黒旗軍の勇將と四百餘州に虛名を鳴らしたる劉將軍は其實何でも無き男なりしかば、命あつての物種なりとて部下の兵士を置き去にし大金を携へ、軍服を脫し、英國商船に乘りて厦門まで遁げ延びければ黒旗兵はおめ〳〵と降參したり。希典は悉く其降を容れ、近衞師團と共に敵軍を掃蕩し、十月二十二日を以て臺南府に入りたりけり。

此にて南部臺灣も全く平ぎたれば十月二十七日希典は南部臺灣司令官に任ぜらる。其翌日近衛師團長北白川宮能久親王殿下臺南府に薨去ありき。希典は宮が金枝玉葉の御身を以て御國の爲に蠻煙瘴霧の中に勇戰し終に斯様なる御末路になりたることを、いと切に、いと深く歎きしかば臺灣神社を建て永く此島の守護神とし祭り參らすべしとて其事を發案し、時の總督たりし兒玉氏を助けてさま〴〵に心遣したりとなり、是は後の事なり。かくて希典は南部臺灣司令官たること半歳ばかりなりしが臺灣は清國の領地たりし昔より難治の國にて土匪起りて數ば官吏を殺すことあるは久しき習なりしかば日本の領分となりても左様の小亂隨分多く希典の心遣も一方ならずと聞へたりしが、明治二十九年四月十二日希典は守備の任を卒へて臺南を發し、同十七日宇品に着し、同二十日仙臺に凱陣したり。

（一六）希典、臺灣總督となること

勝利を祝ふ　甘酒に　醉ひて
覺めざる　人もあり。　萬死を期して
死なざりし　吾幸ありと　よろこびつ
美田を買ひて　子にのこし　靜に老を
送らんと　心のゆるむ　人もあり。
文臣錢を　いとをしみ　武臣命を
愛むてふ　泰平の世と　なりけれど
國の爲には　一日だも　我休まじと
武士の　矢竹心の　一筋に
思ひ詰めたる　希典は　歸陣の席
ひや丶かに　あた丶まる間も　なかりしを
臺灣島の　總督に　なりて行けてふ
九重の　玉のみことを　畏みて

唯だ此上は
その島を
終らんのみと
妻子をば
此頃父は
殘りしが
心はたけく
我も亦
同じ島には
任所に
瘴癘に
つひに空しく
一たびは

我君の
乃木一門の
あはれにも
なれぬ旅路に
とく死にて
身は七十路の
をゝしくて
我子と共に
渡りける。
住みけるに
おかされ易く
なりにけり。
風土の爲に

よさせ給ひし
墓所として
思定めて
伴ひぬ。
母のみひとり
老刀自の
御國の爲に
死なんとて
斯くて
老の身なれば
母刀自は
妻なる人も
犯されて

病の床に
驚かず、
うしはきたまふ
四方の海
仁ある義ある
いそみしし
石もうなづく
懷きつゝ
恩亦厚き
なかりける。
輿論に媚びず
へつらはぬ
水清ければ

臥しにけり。
我大君の
此島を
世界のはてに
御威稜をば
誠の心
ことありて
此總督は
大人と
されど虛名を
世の中の
誠を知らぬ
大魚なし

されど希典
新しく
善き國として
すめらぎの
輝かさんと
切なれば
頑民德に
官淸く
敬はざるは
貪らず
人の批判に
人ありて
新總督は

胸狹く　心小さき　人なりと
云ふものなきに　非りき。　昨日は東
今日は西　毀譽褒貶の　風のまゝ
ゆらぐ柳の　絲のごと　人の眼顏に
氣兼する　才子の多き　世の中に
すぐなる松の　操をば　つひに易へざる
希典は　實に百術は　一清に
如かずと云ひし　其師たる　玉木の翁に
恥ぢざりき。

希典は仙臺に凱旋したる同じ年の十月十四日に臺灣總督に任じ、十一月朔日神戸を發し、同九日臺灣に着し、それより一年三ヶ月ほど總督の役を勤め明治三十一年二月二十六日願に依りて本官を罷められ同日陸軍中將は休職となり、しばらく閑地に就きたり。或人の評に希典は善き軍人なりしかども行政官としては善き官員に非ず。臺灣總督の時は隨分やり損ひ多かりし故早く辭職することになりたりなど云ふなり。さりながら此批判は役人の成功と云ふものゝ標準が定まらぬ故に左樣の論もあることゝ見へたり。其證據には今日の臺灣土人に對し代々の總督の中、何人が最も多く帝國官吏に對する好感を彼等に與へしやを問ふものあらば彼等が必ず乃木大人を以て答ふるを見て察すべし。希典は先づ新領地に渡り行く內地人の行儀より取締り、內地人の優越なる國民的品性を以て土人を感化せんと欲し、清廉潔白を以て一身を處し、內地より渡來する官民、商人にも自身と同樣の心掛あらんことを求めたり。是が則ち希典が或人より水清ければ大魚なし、乃木は胸中小量の男なれば俗物も行き、山師も行く新領地の總督としては融通の利かぬ困つた人物なりと譏られし所以なり。さりながら人の誠は自ら他人に通ずるものにて希典の官に居て清く、土人と內地人とを平等に見做して唯だ正義の行はれんことのみを願ひし君子人なる由は土人は早く認識して今に至りて其德を頌するもの少からず。希典の術は迂にして、希典の略は疎なりと雖も、希

典の誠は異言殊俗の障壁を徹して善く土人の心に映じたり。されば一時の毀譽褒貶は希典に於て何かあらん。臺灣總督として希典の價値は善く土人の心を得たる一點に在りと謂つべし。扨も希典の總督に任せられし時の心掛こそ誠に殊勝なるものなりける。希典思ひけるは吾既に此大任を辱ふしたる上は、我墓所は則ち其地なりと心得べき筈なり。されば妻子を內地に殘し置くべきに非ずとて任地に伴ひ行きたり。新領地などは官途一時の腰掛所か、或は一攫千金の金儲けにてもなし、迹は野となれ、山となれ、左樣の事には頓着せず、諺に云ふ旅の恥はかき棄てにして其儘金を積み故鄕に歸るを成功とするもののみ多き世の中に新領地の青山に老骨を埋めんと豫じめ永住の覺悟もて赴任したる希典の心事、皓々として先づ彼の雜輩を羞殺するに足れりと謂つべし。希典の父は早く死にて此頃は七十餘歲の老母のみ殘りき。此刀自亦女丈夫とも云ふべき人にて我子が遠き島にて御國の爲に御奉公するものを我のみ斯くてあるべからずとて病中ながら希典の後を追ひて渡海しけるが老女の事なれば間もなく病みて臺北の土とはなりぬ。希典の室も同所にてマラリヤ熱に罹り、內地にかへり赤十字社病院にて療治したることあり、一家心を合せて君國の爲に盡さんとしたる狀思ふべし。斯樣に思詰めたる誠心の士人を感孚したるも亦宜ならずや。されど希典の理想餘りに高く、俗人の目より見れば些か壁に馬を乘掛くる樣なる氣味もありしかば例の蔭口言ふものも多くありと聞へたりしが、希典もそれを面白からず思ひしにや僅に一年餘にして閑地に就きたるぞ是非なけれ。

（一七）希典丸龜の師團長となりたること。及び石林村閑居の事。

新高山の　麓をば　我奥城と
定めたる　心の誠　世に知れず
ふりし小琴の　調高く　聞く人もなく
棄てられて　時に逢はねば　希典は

本意ならねども　一たびは　暇申して
歸りけり。　唯だ此上は　殘生を
閑雲野鶴に　なぞらへて　身は太平の
逸民と　なりなんものと　思ひしを
名將の名の　埋もれず　御許るされも
あらずして　再び召を　蒙りて
讃岐の國の　丸龜の　十一師團に
長として　一たび脱ぎし　軍服を
再び着けて　新しき　奉公の身と
なりたれば、　戰勝つて　卒驕る
世の流弊を　たゞさんと　規律正しく
振舞ひぬ。　されば模範の　師團長
日本國に　其人の　ありと世上に
たゝへられ　徳を慕ふも　多かりき。
されど此所にも　希典は　官途の幸の
あらずして　思はぬことに　辭職しつ、
金槐集に　もののふの　矢なみつくらふ
篠原と　實朝卿の　歌ひける
木枯すさむ　下野の　那須野の原の
わび住居　身は閑人と　なりにけり。

希典、第十一師團長となること

希典は志を臺灣に得ず、辭職の後は暫らく閑雲野鶴の身となりしが其年（明治三十一年）十月三日再び出でゝ第十一師團長となり、讃岐國丸龜に赴任したり。赴任の時は妻子眷族を東京に殘し、從卒馬丁と兵營所在地の善通寺村と云ふに或る寺院を間借りし、書生の境界に均しき簡易の生活を營み、毎朝未明に起き出

で必ず馬を師團に打たせ隈なく各隊を巡視し、部下の規律を正したり。希典はきびしき人にて職務を怠るものあれば用捨なく譴責し、其叱りを恐れ過を掩ひ非を飾らんとするものあれば、くわしく尋ね、詳に問ひ、委曲を明にして益す其不心得を詰りければ、部下の將卒も始は唯だ恐ろしき人なりとのみ思ひて迷惑したるも少からざりしが、退て希典自身の私を察すれば所謂己に克ちて、禮に復る君子人にして、國家の爲めに兵氣を振作して、眞の干城たらしめんと唯だ一筋に思詰めたる誠實の自らに現はれしかば始は不平なりしものも後には大に感服し、全師團の風紀は一變したり。たとへば其頃は日本全國の將卒、征清役の功に誇り、人民も兵士を優遇するに過ぎ、些か將驕り、卒惰ると云ふ氣味なきにしも非ず。丸龜師團の兵士なども演習行軍の節、民家に宿り、軍人の歡待せらるゝを善きとにし、缺乏に堪へ、困苦を忍ぶべき演習の主意に違ふものもなきに非りき。希典は左樣の事を聞きしより、其後は行軍の時は民家に宿せず、自身も兵士と共に露營し、梅干、握飯にて幾日も押通すことゝしたれば兵士の風も頓に改まり、人民も大に喜び丸龜師團は日本の模範師團にして希典は師團長中の師團長なりと賞讃するものも多かりける。此頃の事なるべし、希典の妻は所夫の樣子を尋ねんものと東京より丸龜に來りしに希典は我等の許可なくして來りしは宜しからぬ事なりとて面會を許さゞりしかば、已むを得ず、夫の部下の將校をたよりて其家に泊り、さまぐ\に詫入り一週間の後漸く夫妻相見るを得たりしとぞ。平時の兵營に在ること猶ほ戰時の兵營に在るが如くなりし希典の風采想ふべきに非ずや。

希典、休職となること

斯くて明治三十四年五月二十二日まで希典は丸龜師團長として奉職したりしが、此頃馬蹄銀事件と云ふ武官瀆職の獄起りぬ。希典固より其事に何等の關係あるべきに非ざれども、此事の爲に罪蒙りしものは希典の部下なりければ我部下より斯る輩を出したるは誠に申譯なきことなりとて、他人ならば必ず辭職に及ぶ

まじき程の事を、例の潔白の性なれば直ちに退身を願ひ出で此日御許を蒙りて休職となり、それより兼て別莊を營み置きたる下總國那須野原石林村に閑居し、明治三十七年、日露戰役の始まるまでは閑雲野鶴の如く、太平の逸民とはなつてけり。石林村は下野國、那須郡狩野村の大字なり。希典の別莊はまことの農小屋と云ふべき程の茅屋にして貴人の營む世に謂ふ別莊の類に非ず。希典此にて畑一町許りとその地續に山林少々購ひ置きしかば、此處を閑居の所とし鋤鍬を携へて耕作に從事し、田夫野人を友として靜かに餘生を樂しみける。兼ねては新高山の麓に新領土の土とならんと思ひしものを、人生の事、預じめ計るべからず、ものゝふの矢なみつくらふ那須の篠原と實朝卿の歌ひける關東の高原に老農と伍して終らんとす、奇しきは人の運命なりけり。

（一八）希典旅順出征の事

風のさそへば　波も立つ　外物我を
誘へば　境に連れて　動くなる
實に人の身の　運命は　はかり難きが
常にして　時に逢はねば　世にそむき
那須野が原の　老農と　身を埋木に
なし果てゝ　終らんものと　思ひてし
乃木希典も　蓋平に　宋慶の兵を
打破り　名を萬天に　揚げたりし
十年の後に　思ひきや　六十路に近き
老の身を　再び君に　召されつゝ
遼東還附の　屈辱を　忠臣義士の
齒がみしつ　薪に臥して　膽を嘗め
忘れざりける　國敵と　所も同じ
滿洲の　軍の庭に　見ゆべく

劍を鳴らし　鞍により　出陣すべき
身となりぬ。是や誠に　埋木に
花の咲きしに　似たりけり。

石林村に希典閑居の事

希典は丸龜の師團長を辭職したる後下野國那須郡石林の別莊に閑居し、身を老農に伍し餘世を終らんと心掛けまた他事もなく見えにける。希典に二人の弟あり。其一人なる玉木正誼が前原一誠の同志として明治九年の萩の亂に戰死したることは前に述べたり。末の弟を集作と云ふ。慶應二年の出生にして希典には十七歳の弟なれば兄弟とは云ひながら父子にも均しき年輩なり。此頃希典集作を鄕里より石林村に招き、共に農業に從事したりと云ふ。集作は當時四十には足らぬ壯年なりき。石林村は、太田原より北に在りて、西那須野の北部に當れり。此あたり昔は狩野鄕と云ひし由なれば東鑑に建久四年の昔右大將頼朝が那須野の狩を見物したりと云ふも此邊なるべき歟。希典は東京に居りし時も舊曆正月元日には必ず石林村に行き、小作人一同と車座になりて屠蘇を酌み、濁酒を飮み、一同と同じ膳部にて自ら德利を取りて彼等の爲に酌をなし廻り、歡を盡くせしのみならず、年の內に三四回は必ず別莊に住み、自身野菜などを作り、襯衣一枚となりて鍬を用ふるに、土の返し方、作のうね方など百姓も跣足にて遁げだす程に上手なりとて老農も驚きたりと云ふ。かゝりしかば、既に功名の念を斷ちて全く閑散の身となりたる希典が復たび世に出づべしとは當人も思はざりしなるべく、世間も此人は功成り名遂げて閑地に隱棲したるものなり、此上は天下復た此老雄を用ゐるの機會なかるべしと豫期したりしに、遼東還附に引續き明治三十三年に義和團の騷動あり、極東の風雲漸く險惡にして明治三十六年の下半期より日露兩國の國際關係圓滑ならず、遂に明治三十七年二月五日國交斷絕の已むを得ざる勢とはなつてけり。是より先き希典は那須の田舍に居りながら憂世慨國の情已み難く、友人軍醫總監石黑忠悳に折簡して國風一首を贈りけり。

埋れ木の花さく身にはあらねども
　高麗もろこしの春ぞまたるゝ

大丈夫膺に屍を馬革に包むべし。徒らに疊の上に死なんは悔しきことなりてふ老驥千里の志、言外に躍如たり。石黒返し

埋れ木に咲くは櫻の花ならで
　こまもろこしの雪にぞありける

忠悳の父某は德川幕府の末に希典の父十郎と同志の友にてありければ忠悳も希典の未だ妻室あらざりし青年將校時代より互に往事を語り出でゝ不思議の遭遇を喜び、それより父と父との昔の如く莫逆の交をなしけるとぞ。されば此返歌も老友の境遇に對し濃かなる友情を表はしたり。希典、此返歌を得て再び一首を忠悳に寄せぬ。

雪ふれば枯木も花となるものを
　埋もれ木のみぞあはれなりけり

たとへば露西亞と戰端を開き、帝國の忠臣孝子が十年の星霜を歷たる後も昨日の如く思ひ、屈辱の感日に強く、日に深かりし遼東還附の怨をかの大國に報ゆべき日は來るとも、我は既に世に忘られし埋木なり、再び春に逢ふを期し難しと失望の意を示したる歌の心ぞあはれなりける。されど國交斷絕の日に至りて同日動員令の下りしと共に希典も再び現役にかへり、留守近衛師團長に補せられたり。希典時に五十六歲、六十翁に近くして再び鞍に倚りて顧盼し、猶ほ用ふべきを示す。馬援の風ありと謂つべし。

日露戰役、希典出陣の事情

希典の勇將たるは軍人社會の始より知りたる所にて、殊に日清戰役に於ける蓋平の激戰は其頃の新聞讀むものゝ血を湧かしたる記事にして武功世に隱れなかりしかども社會の心理は小兒の心理に均しく善く感じ、又善く忘る。されば今の世に於て日本の津々浦々、たとへば如何なる邊土と雖も乃木將軍あるを知らざるも

のなきに至りしは植木、木の葉の勇戰ありしに依るに非ず、金州、旅順、蓋平、臺南の武功ありしに依るにも非ず、實に日露戰爭の役に於て露國の將軍ステツセルが四萬の大兵を擁して立籠りたる旅順の堅砦を陷れたるに併せて旅順港内の軍艦を破壞し了りたるに依れり。旅順の事ありしまでは希典は唯だ日本の軍人なりき。旅順の事あるに至りて希典は始めて世界の歷史に不朽の名を刻むべき世界の軍人となれり。されば我等も墨を研き、筆を易へ、此に謹んで其始末を序せざるべからず。此に希典の第三軍司令官として出陣し旅順を包圍するに至りし迄の筋道を按ずるに、明治三十七年二月五日日露の國交斷絶して愈よ開戰と云ふ際に押詰めたる頃には日本の陸軍は釜山、馬山浦あたりの帝國に近き朝鮮半島の港を上陸地點とし此處より次第に北方に攻上らねばならぬ程の位置に在りき。仔細は其頃までは旅順の露國艦隊は帝國の艦隊とさまで優劣なき威力を有したる故、浮かと運送船を遠海に出したらんに敵艦不意に殺到したらば、それこそ取返しが付かぬ不幸を生ずることもあるべければなり。然るに此形勢を改善し、我軍隊が始の設計を變じ、朝鮮半島の上陸地點を更に北方に進め得たるものは實に開戰の劈頭に於て東郷艦隊が一大打擊を旅順艦隊に與へ半以上黄海の海權を我手に收めたるに依れり。かゝりしかば、日本軍は始の計畫を變じ、二月の上旬には仁川を占領し、それより仁川、京城間の交通線を確實にし、しばらく仁川を陸兵上陸地點としたりしが、三月の上旬には上陸地點は更に北方に進みて鎭南浦を以て運送船集中の要港となし、四月上旬には更に進んで鴨綠河口に運送船の寄港を見るに至れり。斯樣に韓國に於て日本軍の北進するに從ひ、順次北方の海港を利用し、それを根據地として陸地の難路を棄て直ちに海上より兵を進むることを得たるは是れしかしながら東郷艦隊の成功に依るものなり。斯くて日本第一軍は都合よく鴨綠江に集中するを得たりしかば五月一日には同地に於て始めて露國の大兵と戰ひ、大に之を破り、進んで九連城を占領し、日本に於て强きものは獨り海軍のみならず、陸軍も亦世界の强兵を以て自負せる露國のものと互角以上の戰を爲し得ることを證したり。第一軍がかく光榮ある勝利を得たるより進

んで敵の左翼を壓したりし間に、第二軍は五月五日を以て直に盛京省の貔子窩に上陸し直ちに敵の正面に向へり。貔子窩は日清戰爭の時希典などの率ゐたる第一師團の敵前上陸を試みし花園河口に近き所なり。尋て同月十一日、第一軍、第二軍の陸上連絡成り、次第に味方に都合善き形勢とはなつたれども、此に日本軍に取りては最も恐ろしき危險物あり、他なし、旅順の艦隊是なり。そは露國は開戰の初に於て旅順の海軍が東郷艦隊の爲に痛撃を蒙り、黄海の海權半ば以上日本の手に收められ、その爲めに日本より優勢なる陸軍を滿洲に輸送すること、なりしを以て毎度陸上に於て敗戰するを憾み、此上は本國より更に艦隊を送り旅順艦隊に合し海上權を彼の手に回復し、日本滿洲軍の後路を絶ち、少くとも日本本國よりの送兵を困難ならしめ、更に大に陸兵を北方より進め勝敗の局面を一轉せんと企てたればなり。されば其年三月露國は既に新式戰艦四隻並に舊式戰艦一隻、及び快速なる水雷艇隊より成れる艦隊をバルチック海に艤裝し、此艦隊は六月を以て本國を發し九月には極東に達するを得べしと聲言し、其頃紅海まで進み來りし他の露國艦隊にはバルチック海に回航して本艦隊に合し、かくて正々堂々として極東に進むべしと命じたり。斯樣に露國の言ひし通りバルチック艦隊が都合善く旅順艦隊に合し得べきや否やは其頃專門兵家の間にも色々の議論ありたることなれども、畢竟露國に取りては隨分難事業には相違なけれども、必しも不可能の事なりと云ふべきものに非れば、若し其畫策通りに行はれたらば如何、それこそ誠に日本帝國の安危にも拘はる危險の形勢を生ずべければ日本に於ては是非共左樣の事のならぬ樣にバルチック艦隊が極東の海に浮び來らぬ其前に旅順艦隊を破壞して廢物とせざるべからず。此點に於ては東郷艦隊に於ても色々苦心したることにて其年五月四日名高き旅順閉塞の試みなどもありたることなれども、是は唯だ敵艦を一時、旅順港内に蟄居せしめ、我陸軍の上陸に都合善くなりしと云ふ迄にて、敵艦の戰鬪力が亡びたるに非れば何時突出し來らんも知るべからず。たとへば容易に突出し來ることなしとするも、その艦隊の生命依然として續く間はバルチック艦隊接近し來らばそれこそ由々敷大事なり。されば旅

順の要塞は全體の戰局に於ては之を取るも、之を捨るもさまで關係なき所なれども、其要塞に庇護せられたる旅順艦隊に至りては必ず之を滅ぼさゞるを得ざるものなれば、從て旅順を落すと否とは、日本に取りて國の死生存亡を決すべき重要の問題とはなつてけるなり。此意味を短く言へば

(一)バルチック艦隊と旅順艦隊と合すれば東郷艦隊の一旦獲得したる海上權を薄弱ならしむ。

(二)東郷艦隊の獲得したる海上權薄弱となれば日本の陸軍は其後路を斷絕せらるゝ危險あり。少くとも兵力の輸送前の如く優勢なるを得ざるべし。

(三)日本兵力の輸送、大に衰ふる時に方り露國は西伯利亞鐵道を改善し優勢なる軍隊を日本軍の正面に送り來らば日本軍と雖も必勝を期し難からん。

(四)故に日本軍はバルチック艦隊の極東に到着せざる前に必ず旅順艦隊を破壞せざるべからず。

(五)旅順艦隊を破壞するは獨り東郷艦隊の辨ずる所に非ず、何となれば旅順艦隊は旅順要塞の下に隱れて出戰せざればなり。

(六)旅順は一個の要塞に過ぎず。其四萬の兵は若し優勢なる軍隊を以て之を包圍せば嚢の鼠なり。其取捨固より戰爭の大局に關係なし。之を陷落せしめたりとて、そは唯だ日本軍の名譽を增すだけのことなり。全軍勝敗の大局に於ては士氣の鼓舞、振作に効あるの外、さまでの利益なし。必しも强ひて之を取るの要なきなり。

(七)されど旅順要塞は旅順艦隊を庇護す。旅順艦隊の生命一日だも存續する間は帝國の海上權は猶ほ危險の狀態に在り。獸あり朽木の中に隱る。朽木は獵夫に利害なしと雖も獸を獲んとせば倂せて之を薰灼せざるべからず。故に旅順は必ず之を陷れざるべからず。

(八)かく旅順艦隊の運命が日本軍全體の勝敗を決すべき焦點にして國家の安危存亡懸りて此に在るときは何ものを犧牲にしても必ず旅順を取らざる

べからず。

是は此書の作者の素人軍學に非ず、其頃の内外新聞に表はれたる兵家の說を其儘節錄したるものなり。斯樣の次第にて日本軍に在りては旅順は是非とも取らでならぬ所、如何なる犧牲を拂ひても取らでは困る所なり。然るに此旅順を取ると云ふが實は至極の難事なり。旅順の日本軍に包圍せられしときは三萬乃至三萬五千の陸兵あり。之に艦隊乘組員を上陸せしめて戰場に用ひたらば其數も四五千人はあるべし。されば何程少く見積りても健兵四萬餘は立籠りたることなり。其上露國にて數年來莫大の金を掛けて背面防備をなしたれば誠に金城鐵壁と申すべき程の堅城なり。剩へ彼は逸に居て勞を待つ、日本軍たとへば之に十倍するの大軍なりとも容易に落つまじき有樣なり。是だけにても旅順を攻落さんことは既に甚だ難事なるに、此堅城に籠りたる露兵と云ふ奴が又斯樣なる籠城につきては所謂持つて來いと云ふ誂向きの强兵なり。倫敦タイムスの軍事通信記者は露兵の斯樣なる性質を左の如く記したり。

憐れむべき參謀を有するのみにして運動輕快ならず、且つ共働その宜しきを得る能はざる澁重なる露國軍隊は進軍することを得、運動することを得る敵兵に對しては勝利の機會を有すること頗る乏しけれども、山河の要害に占據し、其側面の安全なる築壘陣地に於て露國兵の守備する塹壕を攻擊するものは決して容易なる成功を得る能はざるべし。

誠に善く露兵の長所を言破りたるものなり。露兵は死を怖るゝこと甚だ少なく、困難に對する驚くべき忍耐力を有し、絕對的に士官の命令に服從すれども鈍重にして融通は利かず、先は武裝したる百姓と云ふべきものにて敵の陣勢の變化に從ひ氣轉を利かして臨機の働きをすることは全く不得手なり。但し其代りに城砦を守り、わき目も振らず命令通り働くことは其長所にして露兵、則ち是れ城砦の權化なりと云ふも可なり。此兵を以て此堅砦を守りしものに向ひ必ず之を陷落せしめざればならぬ義務あり、世に又是程の難儀なる御奉公はなかるべし。されば旅順の攻圍軍は日露戰役の從軍者中、言はゞ第一の貧乏鬮を引き當てたるものに外

ならず。西南戰爭にも希典の位置は誠に難境なりき。今度も彼は貧乏鬮に當りたり。疾風勁草を知り、磐根錯節は利器を判す。易きを捨てゝ難きを取る丈夫の志より云へば、是を幸と云ふべし。縁の下の力持ちとやらん云ふ樣なることにて任務の最も難儀なるに拘はらず、其苦心の俗人に解せらるゝこと少きより云へば是を不幸とも云ふべし。幸か不幸か暫らく之を說くことを止めよ。兎も角も希典は此戰爭の全局に對し、最も重要にして、而も最も困難なる任務たる旅順攻圍の任を蒙りて出征することゝはなりけるなり。

勝典、保典兄弟、出陣の事

希典は其室湯地氏との間に多くの子女ありしかども、夭死したるもありて其頃は唯だ男子二人のみ殘れり。兄を勝典と云ふ。明治十二年の生なれば今年は二十六歲なり。弟を保典と云ふ。明治十四年の生なれば今年は二十四歲なり。共に軍人となりて兄は陸軍中尉、弟は陸軍少尉なりき。希典、始より此二人の男子を軍人として國家に獻げんと思ひしかば其敎育も嚴重なりける。たとへば兄弟、いまだ幼かりし時、希典或時不意に彼等に庭前の木蔭に起立せよと申付けたり。兩人父の命を畏みて立ちしに希典は二人に短銃を差向けて發射したり。其音の畏ろしとて勝典はやゝ氣色を易へたりしを保典は平然として騷ぐことなかりしかば此子のみは乃公の志を繼ぎ得べしと云ひたり。勝典之を聞きて我豈弟に劣らんやとて、恥ぢて且勵みしとぞ。希典は又武士たらんものは常も陣中の心得にてあるべきなり。されば缺乏に堪へ、粗食に甘んじ、飢寒に堪へ得べき訓練こそ大切なれとて子息の食事も必ず一汁一菜と定め、若し食事の時、菜好みなどして、彼は好きなり、是は嫌ひなりなど云ふことある時は希典は何時までも子息の嫌ひなりと云ひし菜のみを膳に供へ、他のものを與へず、子息の困じはてゝ遂に之を食ふに至るを待ちしと云ふ。かゝりしかば子息等は何不足なき將軍の若殿なりしかども中人の家の小兒よりは食物に奢ることなかりしのみならず。嚴冬にも足袋をはかず、襦袢を着ず、素肌に袷を着て寒氣に恐るゝことなかりき。但し斯樣に一

方には嚴重なりしかども子息等が柔術の稽古などして障子、唐紙を押放し、折重つて客間に轉ろげこむことなどありても左樣の時は夫妻ながら微笑して傍觀し、之を制することなかりし程に男らしきこと、武士の子らしき遊には極めて自由寛大なりしとぞ。然るに今度の戰爭始まりしに付兄弟共に第二軍に從ひ出陣したりければ希典夫妻は愛子の武運を祝して其出立を送りけり。是ぞ二人が家を出で、再び還らぬ最後の分れなりとは後にぞ思ひ合せける。

（一九）旅順陷落の事

ちいさき「ジャブ」(Jap)よ　善くしたり　世界無雙の
強兵と　世の大國も　悍りし
露西亞の人の　猛勢を　恐れず畏ぢず
若鷹の　大鳥を見て　勇ましく
空かけりゆく　如くなる　氣象ゆゝしく
ゆたかにて　守勢を取らず　攻勢の
勢つよく　攻めかけて　海陸ともに
不思議にも　最初の勝に　强敵の
膽をひやせし　日本は　國も小さく
人も亦　身幹ひくけれど　國守る
勇氣は島に　みち〳〵て　大和男兒の
膽太く、　善くしたりけり、　よくしたり、
ちいさき「ジャブ」よ、　善くしたり　したり〳〵と
賞められて　日本の武威は　新世界、
古き世界の　果までも　響き渡れり。
さりながら　太平洋の　海權を
我物にして　皇國より　軍の庭に
出すべき　我が武士の　輸送をば